一般教養に傾いてゐる高等教育でも、職業的資格が賦與されるやうになつてゐる。古くからあるお茶の水の專攻科や、近頃の女學校に於ける專攻科は大抵中等教員の資格が與へられる。入學する人々も、資格がつく方を望むやうである。しかし卒業したものが皆就職するといふのではない。所謂萬一の保證の意味で之を要求するのである。だから、現今の女子高等教育は大抵職業教育的色彩があるといつてよい。その中で、卒業したものは、大抵就職するとか、習つたものをもつて起たうとする方面卽ち本來の職業教育と、就職も出來るが、敢へて之をのみ目的とせぬといふ方面とに分けられるのである。前者は卽ち、教員養成の學校、醫術・藥學等の方面であり、後者は卽ち公立女子專門學校や女學校の專攻科や、女子大學の大部がそれである。

何れにせよ、高等教育は漸次盛にならうとしてゐるが、現在の在學生の數から見ると、まだ至つて少數である。最近に於ける全國の高等女學校生徒數は、實科を含めてざつと廿萬人であるが、女子の專門學校在學者總數は一萬二千ばかりに過ぎないので、大體廿人に一人の割である。大部分の人は女學校だけで終をつげるのであつて、上に進むものは、それだけ幸福であり、それだけ責任も重いといふべきである。

2　高等教育の功過

知識でも技術でも、習ひ覺えたものは終生忘れないものなら、まことに都合がよいけれども、之ばかりは金と反對で、使はないとなくなつて行き、使へば使ふほどへらないでしつかりして行き、且つ殖えて行く。

所が、女學校で習ひ得たものが、家庭にはいつてから使ふ事は、今の所わりあひに少いので、二三年すると、もう思考力も鈍り、腕もあやしくなり、色々な學科から修得したものは、母校へ逆戻りして元の杢阿彌女史になりきつてしまふ。

しかし、職業に從事するとか、上の學校にすゝむとかすれば、どうしても今までのものを使ふ事になるから、あやふやな知識もしつかりして來るし、尙新しい知識が蓄へられる事になる。その中でも高等教育に進むとなれば、女學校時代の生活をより一歩高めて、知識生活をする事になるので、これまでやつた事が土臺になり、活用され、その基礎の上に、專門的な力がつくわけになるのである。

現在の高等教育は、男子のそれに比して程度は高くない。これは、女學校が中學校より低度なので、

これを基底とする以上やむを得ぬ事だ。女學校ではとてもたりないとされる當今、たとひ程度は低くても、其上に三四年の修養をつむ事は甚だ効果のある事といはねばならぬ。前に云つたやうに、婦人の地位が向上する爲にも、經濟的獨立の爲にも、善良有爲なる妻たり母たる爲にも、高等なる教育は必要である。たとひ職業教育中心の專門學校だとしても、やはり補助的に一部の高等教育を受けるやうになつてゐるので、三年四年の修業後は、大分頭が出來て來る。殊に、十八九歳以後の三四年は、だん〳〵精神的活動も充實し、大人びて來るので、習ふ事も批判的になり、處世上の經驗と相俟つて、しつかりした力がつく。教へられたものが實になるのである。

之を個人的な利益から見て、右の修養が出來、資格のつく外に、結婚についても、其の教養に從つて、高女出のものよりも一段高い所に嫁ぐものが多いのである。世の中には釣合といふ標準があるので、より高い己に對しては、より高い人が己を求めてゐるのである。

通常婚姻に於ける釣合といふのは、家の格式や年齢などを意味してゐるやうであるが、近頃の傾向からいつても、又實際的生活上の必要からいつても、最も主たる意味を、頭の釣合におかねばならぬ。頭の釣合はつまり學歴の釣合といふ事になつて來る。夫の好伴侶としても、一家の主婦としても、子

供の養育者としても、從來の高女教育では不十分であり、家庭生活に於ける婦人が兎角知識に遠ざかり、やがては主人の思想に追ひつけなくなつて、話のあはなくなるといふ事が破綻の基となるといふ事は、本書の一番初めにも述べた事であるが、この點についても、なるべく多くの教養をつんでおく必要があるし、又、時代の進歩と共に、家庭生活が社會的な影響を受け勝であり、又職業の所で云つたやうに夫や我子の職業の問題から、たえず社會的な問題に頭をつかつてゐなくてはならないのだから、どうしても高い教養が、主婦になくてはならないのである。

日本の高女教育は良妻賢母の養成が主眼であつた。そして現在でもさうであり、將來も變らないであらうし、又變らない事を望むのであるが、良妻賢母たるには高等教育は必要でない、只家政を司る能力があれば十分であるといふ考は、これまでの女子教育觀であつた。これでは良妻賢母主義が、高等下女か高等子守のやうになり勝である。

所が、近頃の女子高等教育主張者の中には、婦人も男子と同樣に、政治家になり、新聞記者になり、大學教授になる必要の爲に高等教育を施せ、また受けるのだといふものがあるやうだが、私は、之等特殊なもの丶爲よりも、一般の女子の良妻賢母たらんが爲に、高等教育を要求したいのである。

男子の職業生活では、人格的教養が等閑になる事もあり、職務の繁劇から、慰藉を求める必要も痛切になる。男子の職業生活の蕪雑に陥り易い半面が、色彩あり、藝術味あり、温味のある生活に依つて補はれる爲には、妻にそれだけの教養が必要となるのである。

妻が良人の善良な伴侶であり、慰藉者である事は、良人の社會的貢献に間接な大きい効果をもたらし、且つ、良人をして操行正しき紳士たらしめるものであるが、その爲に妻たるべき婦人の高等なる教養を要求するのである。更に必要な事は、彼女が母としての要求である。「從來、一般人が教育の必要程度に對する標準を低く見てゐた時代には、母として我子の教育を指導する必要も感ぜられなかつたけれども、此頃では、其の標準が高くなり男女共に高等な教育を要求されるやうになつては、母なるものゝ、我子に對する指導的責任がよほど重くなつたといはねばならぬ。之は單に子供の習ふ學科の程度が高くなつたからといふのみに止まらず、子供の行末の問題に對する高遠な理想を、母親がもたねばならぬ點からも力說せねばならぬ事である。

以上は、大體に於て、妻として母としての必要から高等教育の必要をのべ、從つて其の効果を裏書きしたのであるが、高等教育の經濟的方面に於ける効果をも見のがしてはならぬ。

今日、職業婦人が增加して居るけれども、數から見れば、高等女學校以下の教育程度のものが大部分であつて、之等のものは、收入からいつても、本當に獨立の出來るのは甚だ少いのであるが、高等教育を受けたものは、資格に於てもより高く、收入もより多いので、獨身時代にも大抵は獨立が出來、嫁して後夫の收入を助ける場合にも、不運に際會して職業生活をする時にも、其收入が多いといふ事卽ち物質的利己性のつよいといふ事は、さうした場合の第一要件を滿足せしめるものといつてよい。而して又教養の高等なだけに、社會的に高等な職業に從事する事になり、多くは精神的利己性もつよく、其の貢献がより高い價値をもつてゐるのも、やはり高等教育の賜だといふべきである。

數へあげれば、女子が高等教育を受ける効果は、個人の幸福の上からも、家庭生活の上からも、又社會一般乃至女性の地位の上からも、甚だ澤山あるのであるが、世間には、どうも高等教育を卒へた婦人に、オールドミスが多く、又繼母になる人が多いのは、この幸福感を裏切るやうに思はれる。現在に於て、高等教育を受ける人は、どうしても婚期を逸しがちである。その理由を考察せねばならぬ。

まづ婦人の側からいふと、女學校を出たまゝの人に比して、それ以後三四年の學窓生活が既に結婚

年齢を左右する。殊に學校によつては、修業年限が五年も七年もかゝるものもあり、女醫の如き、卒業しても一人前になるまでに更に幾年かの修業を要するものがある。又入學する迄に、入學試驗の激烈な學校では一二年の準備を要する所もあり、學費や、境遇上からおくれる事もある。かうして卒業する事になると、職業的教育を受けたものは、折角習つたものだから、之を活用したいと望み、一二年は世の中を見せたいといふ兩親の考もあり、且つ專門的に習つた知識や職業に愛着をもつので、家庭にはいる事の必要をさほど痛切に考へない。又已が高等な教育をうけて頭が進んでゐるので、配偶者選擇要件がむづかしくなる。自分が專門學校を出たのだから、まさか中等學校出の人を夫にもてない。このマサカとか今更とかいふ事が、彼女をオールドミスにする魔力をもつてゐるのだ。學友の嫁ぐ先を考へても、もうすこしいゝ機會をまたうとなつて、又年をとる。同等以上の學歴のある人に對しても、何かと能力などに批判の眼をなげて、純眞な愛を俄かに傾けにくゝなつてゐる。

相手になる男子の方も、釣合といふ點から見て高女出のものよりは數が少い。人物さへしつかりしてゐれば、學歴はどうでもといふ事は、女性を索める男子からは聞くけれども、男性を索める女子からはあまり聞かない事である。殊に男子の方は、まだ何といつても舊來の婦人觀に立脚して、妻を尊

敬するよりも、十分に服從させたい心が腹の底にある。と、高い教育を受けたものは何となく煙つたく思ふ。へたな事をいふと、さかねぢを食つて、夫としての沽券が下ると考へる。それよりは、高等下女でなくても、絶對に己をさゝげる忠實な婦人ならば結構だと考へてしまふ。從來こんな人は少くなかつたやうだが、近頃はだん〳〵頭も進んで來たので、當人はやはり妻にも高い教育をうけた人を要求するものが多くなつたやうだ。しかし一方に、家族制度の我國では、この問題に親の考がはいらねばならないが、親、殊に母親は、現代に於て、婚期にある男の子をもつ位の年の母親として、其の學校時代はまだ女大學式の教育をうけ、又其程度も今日よりは低いものであつた。そこへ、立派な學校を出た、横文字のうんとよめる嫁をもらふといふ事になると、何だか一種の壓迫感を覺える。嫁に對する壓迫感などは、我國の昔にはなかつたものだのに、姑の壓迫が嫁の壓迫へと逆轉するやうな氣づかひは、母親の心の底に不安を與へ、從つて選擇の圈内から洩れるやうになる。かういふ風に兩方に面倒な事情があるものだから、どうしても婚期はおくれ勝である。殊に、それが職業婦人になつてゐる人に於ては、一層結婚難に陷り勝であること、前にのべた所を對照されたならば判然する事と思ふ。

高等教育をうけながら、晩婚になり、とどのつまりは、再婚者の所へ嫁ぎ、子供のある家庭へはいつて、純粋な初婚者の家庭の味を味ひ得ないものが可也あるやうだから、かういふ事を考へると、何だか、賢母良妻たる必要から高等教育を主張する事と、矛盾するやうな氣がする。少くとも現在はこの矛盾に苦しんでゐるものが實際ある。けれども、この矛盾は永久的なものではない。畢竟過渡期の產物である。一般の人の婦人觀が、舊態を脫し得ない時に、逸早く、時代の先驅となつたもの丶拂ふ犧牲である。婚姻時期は曖昧な時代、未開な所ほど早いのに、近來の我國の統計では、逐年、結婚平均年齡がおそくなりつ丶ある。そして、一般に女子教育の必要を痛感し、高等教育をうけるものも年々增加し、男子の側も、高等教育機關の擴張によつて、其の業ををへたものが多くなり、其人々が女性を尊重し、高い教育あるものを妻としてむかへようとする傾向が濃厚になつて來つ丶ある。矛盾にやむ時代も決して永くはなからうと思ふ。

だが、アメリカで問題になつてゐるのは、女子の高等教育と出產率の問題である。合衆國ではどんな最高學府へでも女子が入學出來る。大學生の三分の一以上は女子であり、全體の婦人の四十分の一が大學に居る事になつてゐる。同じ階級の婦人でも大學に行く婦人は、行かぬものよりは結婚が二年

おくれる。それでなくても既に大學生になる階級の婦人は他の階級のものよりは晩婚で、二三年は遲れるのだから、女子の大學生は結婚に於て他よりも五年も遲くなる。且つ大學を出た婦人の六割は結婚しないといふ事を、一九一四年のアメリカ合衆國統計年報が示してゐる。一般の婦人は十分の九迄結婚するといふのに。

そして又、大學卒業生は、結婚しても、生む子供の數が非常に少くて、平均數が二人である。或る大學の卒業生は一人强である。大學生活は女子の生理的勢力の最も旺盛な時だから、之が出產率に影響するのであらう。大學に行くやうな優秀な婦人がだん〳〵子供を生まなくなり、平凡な婦人のみが多くの子供を生むといふ事になると、これは大きな社會問題である。

一體、今の女子高等教育は、女子としての能力の增進といふよりも、家庭を去つて社會に出ようとする所謂婦人運動の一部であつて、婦人は男子と同等な準備をなし、男子と同じ機會を求めてゐるのであるが、婦人が之に成功すれば、婚期を遲らせ、又は之を失つてしまふのである。卽ち、結婚して子供を愛するか、職業婦人となつて、事業を子供として愛するかといふ事になるのである。で現在では、平凡な婦人が母になり、優秀な婦人が職業婦人になるといふ現象であるが、人種改造の立場から

も、社會幸福の立場からも、之が逆にならねばならぬ。我國ではアメリカほど、この傾向は甚しくないが、高等教育が盛になればなるほど、其の傾きはつよくなると思ふ。社會的な立場を離れて、終生職業に生きるが幸福か、母となるが幸福かは貴女自身の大問題である。之は次篇に於て又說く事にしよう。

一四　高等教育に進む人へ

1　學校を選ぶに

時代は進んだ。どうしてももう一歩進んで上の學校にはいらうと決心がつく。さてどんな所がよいかといふ問題になつて、グツとつかへてしまふ。よくわからないから、隣村の人のはいる所へ一緒に願書を出さうとか、親類のものがいつてゐる學校にしようとか、さうした便宜主義や雷同主義できめてしまふものも少くないであらう。だが、出發點で方向を定める事は、やがて其の人の運命を決定するやうになるものだから、愼重の上にも愼重にしなくてはならぬ。

先決問題として、自分が職業婦人として起たうか、一般の高等な教養をつまうとするかを定めなくてはならぬ。その何れにすべきかは、個々の人の能力・希望・事情・境遇・資力などの要素によらねばならない。そして其の定め方については、序論の所で方針決定の要素をあげ、又職業の章で說明したので、之等の事を參照してしつかりと決めてほしい。

方針の決定が將來の運命を左右する點は、現在男子に於て、より甚しい。女子は其の嫁ぐ先きの運命が自分に影響する事のつよい性質をもつてゐるので、學校の選び方はさほど重要でないやうな氣もする。だが、婦人はたとひ職業婦人にならぬ迄も、其進んだ學校の良否は、自己の價値を左右し、世評に影響し、從つて大切な結婚にも影響する。職業の爲の高等教育になると、家庭の人となつてから職業との兩立が困難であるかどうかも考へねばならないので、やはりむづかしい問題である。よく考へてもらひたい。

自分の前途を愼重に考へれば考へるほど、己を鍛へあげて或程度の完成の域に迄達成させてくれる學校の選定を誤ることは、其の惡い影響がつよいものである。入學するや否や不滿足が生じ、最初の緊張した態度が、不眞面目なものとなり、其の間に種々の隙から惡い事が起つて來る。だから自身の

問題の決定と、學校の決定とは兩々相またねばならぬものである。

イ、修學の程度

職業につく考もなく、只一般教養を高めようとする人では、修業程度をどの位にすればよいか、女學校の高等科の如きは、全國各地にだん〳〵行亘りつゝあるので、之に進む事も適當であらう。が公立の女子專門學校か更に女子大學等に入學する事も、事情が許すならば望ましい事である。一般教養を目的とするものでは大體學校の種類もこんなものだが、職業志望になるとなか〳〵多い。

高等職業教育として最も多い志望者のあるのは教育方面である。教育家たらんとしても、其一番高い程度のものとしては、女高師や女子大學の教授であるが、これ等は前にも述べたやうに、大學へ行つたものとか、母校に永年ゐた人を引上げるやうなのが多く、一般には中等教員になるものが多數である。之も兩女高師の入學が困難だから、優秀でなくば、他の私立の高等師範科を出てもいゝ。學費の都合では師範の二部でもよろしい。男子ならば、今の所學校の程度が高いほどいゝのだが、女子は男子ほど學歴が將來を決定する度が甚だしくないから。

天才的な仕事は、學校を出たといふ資格が大したねうちにはならぬ。能力次第である。美術學校を

出たから立派になれる。師についたのみだから發達せぬといふものではない。が大體に於て、學校で組織的に修業するに越した事はないのは勿論である。學校を出たものが皆卒業と同時に閑秀畫家になり、聲樂家として時めき、作家として名をなすといふわけではない。

醫術方面の仕事はどうしても專門學校を出なくてはならぬ。女醫・齒科醫は學校卒業によつて開業が無試驗で檢定され、又されんとしてゐるが、之とても修業年限が、女醫は五年、齒科醫は三年の上に、若干年の練習期をおくので、學費の事や結婚年齢の事なども考へておかねばならぬ。

かういふやうに、自分の希望する職業によつて、或は程度や年數の種々なのがあり、一定したのがあり、卒業して就職するにも難易があり、收入にも差があり、業につくにあたつて費用のかゝる事の多いものも少いものもあるのだから、能力や體力の外に資力との相談をして、程度を定めねばならぬ。

ロ、同じ程度の學校で

同じ程度の學校の中でどんな所がよからうかが、次にきめる問題であるが、之は第一に其の學校の學風を考へねばならぬ。學校によつて、教師の立派な人のそろつてゐる所もあり、二三人いゝ人をそろへて、あとは見劣りのする人ばかりの所もある。東京あたりだと、知識の切り賣り的に三つ四つの

學校を掛け持ちして、單に教へるだけの先生といふのがある。つひ忙しさに、教へる事も十分にいかず、生徒も緊張せぬといふ事になる。財源の不十分な學校にはかうした所があるものである。

學校の主義方針は集る生徒の風儀とか氣風とかいふものに大きな關係をもつ。何となくだらしのない學校があり、生徒の中にも素行の如何はしいものの多い所があるし、又秩序整然といふ事が學校にも生徒の一擧一動にも表はれてゐる所もある。それから、學校によつては、上流の令嬢のみ集る學校があり、比較的プロレタリア令嬢の多い所もある。これによつて服裝がちがひ、氣風がちがひ、交際の方法もちがふので、學資にも關係してくる。同じ程度の學校でも、學校によつては、語學とか技術の方面とかの程度を特に高めておく學校もあるから、己の能力を省みて、其の學校が己の能力以上か以下かを考へておかねばならぬ。

第二には學校の沿革の新舊である。由來、歴史の古い學校は社會的信用も動かず、教師の顔振れや諸種の施設も、整うてゐるものが多いし、先輩が社會的に重きをなして居るので、世の中に出た後も色々便宜が少くない。が新設の學校では、先輩も少いし、社會的の信用も固定しない、學校の設備なども完全しないといふ缺點はあり勝だが、古い學校のやうな因襲的な、舊套に囚はれた所がない。學

生は新しい氣分、建國の民のやうな心持で研鑽を積む。社會に出ても、先輩もない孤立無援の寂しみは、努力の熱で一掃し、自分が將來の有力な先輩として後進を誘導し、母校の聲譽を隆盛ならしめる事も出來る。つまり骨は折れてもやりがひがあるのである。

第三には學校の特色である。同種類の學校の數がましてくると、各々競爭になるので、勢ひ各校が特色を發揮しようとする。で教授の顔ぶれ、教育方針等學校內部の特色と、卒業後の就職等についてどの方面に活動してゐるものが多いかといふ事などを調べる事は、學校を選ぶに必要な考察點である。尙右の外、女なるが故の、居所の安全といふ事から、志望學校に入學するに、自宅から通へるか、親戚に身を托するか、寄宿舍にはいるかなどについては、特に用意を周到にせねばならぬ。兎に角、專門學校になると、勉强の仕方も教へ方も、訓育の方法も、女學校時代とちがふから、より高い學校にはいつたといふ誇に心をうばはれて、魔道に陷るやうな事があつてはならぬ。

註　學校選擇に便利なものに、東京市神田區錦町三ノ一弘道館發行の女子高等專門學校總覽表といふのがあつて、毎年秋に、新調査表が出る。入學の要項や圖解無ものせてあるから、入學志望者には極めて便利であらう。

2　學習の態度

女學校時代は、少くも今日までは、教へられたものを忠實にのみこめばよかつた。けれども專門學校殊に職業の爲の學校では、こゝを出て一人前の腕を以て働かねばならないのだから、只お座なりの勉强では力がつかぬ。研究的な態度で進むといふ事が何よりである。誰でも入學したてには、可也な抱負をもつて勉强をするけれども、新生活に順應する力がたりないので、やる事に無駄がある。骨折の割に効が少い。その中にだん〳〵勉强のコツがわかつて、勞少くして効の多い事を覺え出す。さういふ時に、勞を惜しまず勉强すれば、力がつくのだけれども、勞少効大を知る頃には、研究的態度でなくなり、與へられたもの、强ひられるものを要領よくやり了せて、あとは遊ばうといふ態度になつてしまふ。男子にはかうして色々な娯樂から、はては道樂に耽つて、學業そつちのけにするものが多い。けれども女性はまだそれほどの惡い徹底を自己も社會も許さぬであらう。學科によつては、餘裕の多少があり、從つて學習の態度一つで、修業期間に於ける力の程度に非常な差が生じて來る。

現在の高等教育には著しく職業的色彩がつよいと思ふから一言しておく必要がある。といふのは、其の職業的方面に專門の知識をもつてゐながら、一般的な、人として婦人としての必要な陶冶方面に、

缺陷のある事である。理科・數學をやつた女性は、うるほひが少く、何だかパサ〳〵してゐるとか、裁縫などやつた人には思想や文藝などの頭がないとかいふ批評をきく。之は專門的知能を養ふのに三年や四年ではたりない位だから、外の方に頭をつきこむ餘裕がないからでもあらうが、やはり婦人としての立場からは、專門に餘する傍ら、或度まで美はしい感情の持主としての必要な修養をつみたいものである。職業生活で生涯を終始し、妻たり母たるの責務をすてるといふのでない限り、よく己の將來の爲を考へて、必要な修養をつまねばならぬ。

3　苦學

女に苦學が出來るだらうか！

い〳〵頭をもつて生れて、小學校をいつも優等でとほし、先生のたつての勸めで、親も組食に甘んじ、組衣をまとうて、やう〳〵の思ひで女學校に入れた。すると、やはり一年から卒業まで一番をとほしつゞけた。その中で特にすぐれた學科がある。之をもつて專門的に尙一歩やらせたい。やりたい。しかし學費がなくてはどうしようもない。かういふ人は廣い世間には少くないであらう。毎年女學校を

出る數萬の卒業生の中にも相當にある事と思ふ。女に苦學は出來ないものかしら。

通俗には不可能と困難とは同一に扱はれてゐるが、不可能は人力のよくせざる所であり、困難は之をしのべば可能なものである。女子の苦學は不可能ではなくて困難なのである。男子の苦學も決して困難でないとはいへないが、女子の方がより困難だと思ふ。

苦學にも色々ある。學校を卒業してある資格をとる爲の苦學もあれば、學校へはいらずにある資格をとるのもある。學資が乏しくてやる事だから、どちらにしても働かないではゐられぬ。働きつゝ勉强するのだから、年數などもよけいにかゝるし、成績も拔群といふ事を强要するわけにいかぬ。働いて金を得るといふ事にはかなり頭をつかふもので、勉强してゐる事と、やつてゐる仕事とが同じ道のものならいゝけれども、まるでちがつたものであるとか、金を得る爲にエネルギーと時間との大部分を使ふといふ場合には、學問がずゐぶん困難になる。殊に男子とちがつて、女性なるが故の誘惑もあり、女性に適した苦學の道も男子ほど多くないのでなか〳〵苦しい。

學校にはいらずに資格をとる方だと、臺間働いて仕事のすんだ後に勉强が出來る。仕事本位にして收入を多くし、參考書などもわりに買へる事にもなり、年數も自分の都合でどうにでもものばす事が出

來る。しかし、之は己の都合と、仕事にエネルギーを奪はれる事との爲に、思ふやうに勉强出來ないから、自分の意志をよけいしつかりさせておかねば中途で鈍つてしまひ勝である。年數がかゝりすぎれば、深夜机に倚つた時も、勉强の頭を外の方に向けて、これほどの努力が結局何になるだらうかと、疑をもち、このまゝ家庭の人となつた方が幸福ではあるまいかと、目的の二重生活がはじまる。すると勉强も十分に出來なくなつて、中途でやめてしまふ事になり易い。

けれども、一旦學校にはいつたものが何とか學資の出る道を見つければ、苦しいなりにも、ところてん式に、學年を追ひ、試驗をどうやらパツスしてその中には卒業してしまふ事になるので、獨學によるよりも成業は早いのである。只、働く口が問題である。

働く口は何といつても大都市に多い。大都市には同じやうに苦學をしようといふものが澤山集つてゐるから口をさがす人も多いけれども、口も多いから、有力なもの〻紹介を得れば、よい口が見つかる事も少くない。で、家庭教師・筆耕・女中などをして學校に行くのであるが、家庭教師も、女學校を出て、專門學校にはいつたばかりでは、なか〳〵思ふやうに教へられない。もつと資格の立派な實力ある候補者が多いから口が得られぬ。よし得られても、なか〳〵氣づかひの多い仕事である。教へる

子供が我儘だつたり、成績が劣等だつたり、主婦が冷酷だつたり、主人が親切すぎて妙な氣がねをする事が起つたりで、思つたよりも苦しいものである。それでも毎週三四回、夜分だけ二時間も勉強のお相手をすれば二十圓位にはなるから、乏しい學資のたしまへにはなる。でも、之だけでは食へない。家庭に住込んで、お子樣付になるとか、奥女中になるとかいふのもあるが、日本の家庭では、晝間通學して放課後から夜まで務めるといふやうな所は中々ない。

女子の學校は、夜學といふものが殆どない。あつても男女共學で、多くは社會科學の方面である。裁縫とか國文とかいふ方面のものは、夜學には少く、只、東京では文化夜間女學校で家事科の中等教員の準備科があり、本郷の女子經濟專門學校の夜學部に、經濟方面のものが新設されたやうだが、他の學科の志望ならば、どうしても晝の通學にしなくてはならぬ。だから、理解ある家庭で、通學の費用を出してもらひ、學業の外は家事に働き、其後で二宮尊德流に勉强する外はない。

苦學をするのにいゝ方法は、師範の二部を一年やつて、小學校訓導の資格を得る事だ。之は、獨學にも學校にはいるにもいゝ。地方の師範の二部だと、一年やつて卒業した後、義務として二年位奉職せねば他府縣へ出さない所もあるから、志望する大都市の師範二部を出て、其都市又は附近の學校に

就職すれば、夜の學校に通ふ事が出來る。東京では、日本大學の各專門部、東洋大學の專門部で夜學男女共學を許してゐるから之に入學出來る。又晝間勉强したいならば、夜間の授業の小學校へ奉職すればよい。教員ならば、比較的勤務時間が短いから、獨學にも通學にも都合もよく、女學校出の事務員などよりも、收入も五割位多いから、苦學によい。夜學に行くには事務員生活でも可能である。が晝夜二つの仕事をもつ事になるので、よほど體の丈夫な、意思の强い人が、たゞ健康に注意を拂ひ、自己をむちうたなくては、折角の志望も中絶する事になるであらう。

晝間通學して夜何か仕事をやるとしても、學校によつては、そんな餘裕のないものがある。理化・醫學などの學校では實驗や實習に時間をとり、裁縫などの學校でも例の細目がぎつしりわりあてゝあつて、毎夜十二時迄も縫はなくては遲れてしまふといふ位だから、他の仕事などやりたくもやれぬ。又學資の多寡も苦學の能否を決定する。裁縫科などは縫物の材料費がずゐぶんいるから、なまじい、他の學校よりは學資がかゝる。

要するに、苦學をするには、よほどつよい意志と、丈夫な體とをもつた上に、學資のかゝらぬ、ひまのかゝらぬ學校を選び、勉强の出來るやうな仕事によつて學資が得られるといふやうな場合でなく

ては、とても成業はむづかしいといはねばならぬ。父兄とか府縣とか、何かの團體とか、篤志家などから、學資の幾分を出してもらふ場合は別だが、自分が全然自活しながらだと、如上の困難がある。よくよく周到な準備の下に計畫せねばならぬ事だ。

一五　家庭に於ける修養

1　家庭に止まることの得失

時代が進んで、女學校を出たものが、或は上の學校に行き、或は職業について、從來の箱入娘が皆箱から飛び出す時に、自分ももつと勉强したいが親が聽かぬ。職業に就きたいけれども事情が許さぬといふ事の爲に、家庭に止まつてゐなければならない人にとつては、何だか家庭に引込んでゐる事がむしやうにつまらないやうな氣がするであらう。けれども、年々數萬の女學校卒業生の中、上級の學校に入るものは、約廿分の一にすぎず、職業につくものも、大都市以外では大した事はないのだから、大部分の卒業生は皆家庭に止まるものと見てよからう。で私は、家庭に居る事が、それほどさびしい

ものであるかどうか、それほど無價値であるかどうかを考へて見て、本當の充實した氣持で三四年を送る事の出來る工夫を、諸嬢と共に考へて見たいと思ふのである。

今の時代は、思想的方面にも、諸種の社會制度や慣習の方面にも、舊態から新形式へと生まれかはらうとする過渡期であるから、職業婦人になつても、高等教育をうけても、どうしても過渡期の犧牲となつて、缺陷を身につけ勝ちである。が家庭に居るものは、此の過渡期の影響をうける事が極めて少いので、何よりも安全だといはねばならぬ。

何といつても、女性は純粹無垢な心と體とを以て、結婚生活に進むことを常道としてゐるのであるが、どうも社會に活動し、知らぬ土地に行くといふ事になつて、親許をはなれると、さうした事に危險がともなひ易い。この點では箱にはいつてゐた方が安全である。

進んだ國では、男と同樣に女も男の仕事や地位を得ようとしてゐるけれども、女は女としての職分がある。之に忠實でなくてはならず、之が爲の修養を怠つてはならないのであるが、高等教育に進み、職業につくと、どうしても女性本來の職分といふものが、疎んぜられ、輕んぜられる。さうして、やがて、高等教育を卒へて家庭の人となり、或は職業婦人が主婦となり、母となつた時に、今更の如く

其の職分への實際的修養を等閑にした事が後悔されるのである。

所が、家庭に居る人にとつては、彼女等の怠つてゐて後に困るやうなものを、たえず修練してゐるのである。主婦となり母となるに最も必要な實際的訓練をうけてゐるので、結局の幸福と勝利は之に歸してしまふのである。如何に知識に秀で、技能に長じても、女性はやはり女性としての、本能的職分に滿足がなくては幸福たり得ないのである。

職業婦人には、前述の如く掃除や勝手仕事を嫌ふとか、夫や姑に事へる心持が稀薄だとか、男を何とも思はぬとか、贅澤・買喰ひずき・理屈つぽいなどの非難がある。職業婦人となる人が、皆物好で働きに出るといふわけではなく、いやでも應でも、經濟的必要に迫られて出る。さうして、かゝる缺陷をしらず〳〵身につけてしまふ。中には職業上から、不治の病氣さへも負ふ事もあるのである。

だのに、卒業してからどこへも働きに出る必要もなく、尙實際的な修養をさせてくれる兩親をもつ人は、幸福を感じ、感謝しなくてはならないのである。で、家に止まつてゐるといふ事は、適當な時期に結婚をする事に容易だといふ事も前にのべた通りで、女性の根本的な滿足として、妻たり、母たる機會を適時に握る事は結局一番幸福な所以である。

かう考へてくると、家庭に居る方が一番いゝやうになつてしまふ。にも拘らず、之を不滿に思ひ、つまらなさを叫つ人が多いのは、やはり、そこに何かの理由があるからである。

學窓生活の無邪氣な、日々に習ふ事の變化のある此の四五年の生活が一轉して、あけてもくれても同じ家庭で、同じ家族と暮してゐるやうになると、どうしても變化なき單調にあきあきする。時々友だちと行つたり來たりしようとしても、妙齡の處女をやたらに外へ出すといふ事は、良い家庭のする事でないといふ事になつてゐる。出かけるにしても、袴をつけた學生時代のやうに簡單にはねまはつて行くわけに行かぬ。ちよつと出かけるのにも、事が大袈裟になるから、單調ながらに箱にはいりこんでしまふ。其の間は世間の變化に接しないから、苦勞もしらず、世の荒波も解せぬ事になり、又何となく生活がたるんでゐるので、本をよむのも億劫になり、知識に遠ざかり、從つてだん〳〵頭が低下して來る。女學校で習つた事を追憶して見ると、色々の學科から得た知識が、斷片的に頭に殘つてはゐるが、あやふやになつてゐる。ナポレオン・ヂヤンヌダルク・始皇・頼朝・知惠伊豆・義貞、知つてはゐる名だが、どつちがさきだか、どんな事をした人だかが明確でない。何縣からどんな產物が出るかもあやしいし、ボルドウが英國だか佛國だかもはつきりしなくなる。よくは覺えてゐなくても慥かに

習つたといふ覺えはあるのである。他の學科でもさうで、放置しておけば、揮發してしまふ油のやうなものだ。之ではつまらなくなるわけである。何とか將來に必要な知識だけでも、活かす工夫はないものであらうか。

(2) 家事修養の急務

近頃、婦人は家庭から解放されねばならぬといふ說をなすものが多くなつた。さうして共鳴者もなか〳〵たくさんあるやうである。家庭からの解放は、料理・洗濯・育兒の煩累から解放される事のやうに思ひ、少くともこの家庭內の仕事を輕視し、馬鹿くさいと思つてゐる婦人が多いやうだ。日本の國家はあぶないものである。

うまいものはたべたい。汚い着物はきたくない。ほこりだらけの家に寢起きするのをほこりとしたくない。我兒は丈夫に立派に育てたい。さうした念願は持ちながら、家庭の仕事をうるさく思ふといふのは、如何にも大きな矛盾であり、女性生活に對するこれほど大きな反逆はないのである。

生方敏郎氏の「女性は支配する」の卷末に、「妻の留守」といふ小說がある。子供が入院して妻が附添

ふ間に、夫が殘る三兒の世話をする事を中心にして、極めて如實に描寫されて居るが、之をよむと、如何にも女の仕事が案外大へんなものだといふ事がわかる。「お前達は朝から晩までうちに居て遊んでゐるくせに。」とは、勤めからかへつた夫がよく叱る事だ。が一日妻と交代して見ると、如何にも細君大明神なる事がわかる。それも夫はたゞ妻と交代の眞の一日だけをつとめればいゝのであるが、年中家事に當る主婦は、日先の仕事の外に、來らんとする季節の必要な衣類の用意から、明日明後日の漬物の用意も必要である。子供の一すした怪我の始末から、子供の惱みの救もしなくてはならぬ。といふわけで、頭のはつきりした仕事のテキパキ出來る女でなければ、家の中はいつも豚小屋である。

家庭婦人として無資格な、家庭內の仕事も子供の始末もうまく出來ない女、そして家庭外の勞働はどの位苦痛なものだかを知らない女にとつては、女權主義者の「婦人も家庭を捨てゝ男子と同等に同じ勞働に從事せよ。」といふ言葉は非常に都合のよいものに響くであらう。朝から晩まで自分を縛つてゐる家庭の仕事といふ繩をたち切つて、自分のすきな仕事ばかりをして、自分で取つた給料を思ふまゝに使ふ事は愉快なやうに思はれて來る。金を所有してゐる男、自分を制裁する權利を持つてゐる男に從屬してゐて、自分の身のまはりの物を買ふのに、其男にお願ひし、ねだつて買ふよりも、自分の

腕で得た金を使ふ方がどの位愉快かと思ふ時に、女權主義者が「自分の生活費は自分で儲けよ！　家庭以外から自分の生活費を得るやうになつた時に、婦人の家事的奴隷からの解放は實現されたのだ。」との叫びは、彼女等を共鳴させるに十分である。之に贊成した婦人が商賣などをやつて、金儲けをすると、社會の金は全部男の所有に歸するものでない事の證拠だとしてやんやと讃美するものがある。だが、一圓の救ひ主となるやうな大偉人を生み育てた婦人が、夫の金で生活してゐたといふ理由だけで、古い型の奴隷的な女だと排斥し得るだらうか。

もしも、主婦が家事を取らないならば、家庭の仕事は金を拂つて人に頼まねばならぬ。同じ仕事が金を拂ふと奴隷的な仕事でなく、金を拂はぬ妻の仕事となると奴隷的な仕事となつてしまふ。一家のためを思ふのでなく、家族に愛情をもつのでなく、唯金が欲しい爲に雇人が働けば、人間らしい仕事で、主婦が心からの愛情をこめて一家のため、夫の爲め、子供の將來のためを思つて働いたのでは奴隷的な仕事だといふのでは、如何にも變だ。私は家庭的奴隷を讃美する。かうした主婦は奴隷に非ずして、努靈である。淡靈である。

「家庭を捨てよ、家庭の羈絆から脱する事が婦人の解放である。」と宣言する女權主義に漠然に共鳴し

たものは、人類の幸福をドン底に落すものである。今や新國民の健全な發育の爲と、男子の奮鬪に疲れた心身に、更新の氣を與へる事とに必要な家庭愛の精神は、個人主義的な唯物的な女權主義によつて窒息せしめられようとしてゐる。彼の先進國では、此魔物ともいふべき思想にゆきづまつて弱つてゐる。我國でも新しい所が、新しいものを皆眞なりとして淺はかにも之に共鳴し、之に追隨し、やがて行きづまらうとしてゐるのである。婦人の行く道と男子の行く道とは複線の軌道である。平行的進行をとるものである。決して男性の軌道の上をのみ走るものでない。女性としてのつとめ！　之をしみじみ考へねばならぬ。

女が男の中で仕事をする事がはやり出してから、家にゐる消費者的生活が、不生産的だとして忌まれ出した。が私にいはせれば、婦人の消費擔當は、やがて、間接に大きな生産をなしてゐるのである。外に出て本當に活動の出來る男子は、家庭に於ける合理的消費が原動力になつてゐる。食・衣・住の全般に亘つて、前に云つた更新の氣分を養ひ得る事が、偉大な生産の基であつて、之は主婦の仕事なのではないか。

だから消費者としての家庭婦人は、家族の健康の爲に、毎日家所に取入れる食料の品質を吟味し、

正當な價格を承知してゐなくてはならぬ。收入の不十分な場合には、最少限度の消費で、最大限度の滋養分を家族のものに與へる工夫が必要である。一家を不都合なく切りもりすることは、男子が大規模の事業に手腕を振ふのと同じ手腕を要するのである。この點からいへば、婦人の解放といふ事は、苦しまぎれに家庭を捨て、より一層苦しい屋外勞働に出て賃銀といふ鎖に繋がれる事ではなくて、家庭内の仕事を易々とし了せる能力を作ると同時に、收入を償はせる手腕を養ひ、自分の家庭を根據として、家庭に及ぼす政治・產業・教育等の變化に、絶えず心を配り得るやうな、一家の女王となる事である。

さうして、その基礎的修養は女學校に於て養はれて來たのである。今其の使命を自覺し、こゝに實地修練の機會を與へられたのであるから、大いに精進せねばならぬ。かうなると、婦人が單調をかこつといふことは、結局嗔のない、自覺せぬものゝする事である。

貴女方には成程度の學問がある。が家庭に於ける料理・裁縫・育兒・衛生などには、昔からの傳統に從つて、無批判で習慣的に行ひつゝあるものが實に多い。教養ある若き婦人が、學校で習つた事を棚に上げて、やはりこの傳統を踏襲し、無批判的に從ふのでは、數年の學習の功は何にもならぬのではな

いか。一つの料理にも、カロリーを考へ、洗濯するにも化學作用をしらべるといふ學理的な頭で、傳統にからまる家事全般を觀たならば、改造の餘地はありすぎるほどあるのである。しかし乍ら、之をすべて學理にでらすには力が足りないかもしれぬ、足りない所は研究すればいゝ。どんな方法で研究したらよいかわからないといふ事は、教養から見ても云へない事だと思ふ。或る家庭では、學校を出た令嬢に家計の一切をまかせて、收入支出の償ふやうに、獻立も何も皆計畫せしめてゐる所がある。之は極めて面白い、有意義な修養だと思ふ。

3　積極的な修養法

家事に對する研究的態度での實習は、家庭の女王としての大部分の要素をなすものであるが、尙進み行く社會に眼をむけるといふ事を、決して閑却してはならない。しかもこれは、女學校を出て、一番怠りがちな事であるから。

之が修養の第一は讀書である。一人でいつでも出來るものは讀書である。居ながらにして聖賢に接し、淑女と談るを得るものは讀書であるが、上の學校に進んだつもりになつて、なるべく系統ある讀

書法をとらねばならぬ。精讀と多讀とを併用し、無系統な濫讀をつゝしまねばならぬ。

一人での讀書では單調だが、私の是非すゝめたいのは、親しい友との讀書會である。月何回かを各家庭もちまはりにするか、一定の場所かで開き、何かきめた本をよんで話しあひ、討議しあふのもよろしい。が、そのひまがなくば、書入れ式回覽の方法をおすゝめする。之は、たとへば五人の親友ではじめるとすれば、別々の本を五人が一冊づつ買つて、互に交換してよむ。一人一冊買つても五冊よめる事になる。そして、各自が、本の内容について、感じた感想や批評を欄外に書く。次の人は其の書物と前の人の書いた批評とを併せよむので、とても興味がある。五人のものが欄外處せまきまで、ギツシリと書いたものは、單なる書物ではない。五人の其時の心持が、書物の中味を媒介にして、一つ心に融けあつてゐる。そして之は書物のある限り、其時の心持を永久に語るものである。經濟的で又有効多趣味な方法だと私は自信してゐる。女性なるが故に、妙なこだはりがあるかもしれないから、本當に心のあつたものなら、二人でも立派に出來る事である。是非やつて見てほしい。

尙、本をよむと話題が豐富になるから、之を中心に時々座談會を開くのもいゝ事である。世間話のみでなく、上品な、有効な中心問題を皆で語りあふ事は、互の單調さに對する慰藉になり、有効な刺

戟になり、讀書慾を非常に促進するものである。又、修養や思想方面の雜誌の愛讀者が、支部式のものを作つて、之を中心に會合するのもいゝ事だと思ふ。

之等は、文化に緣の遠い地方でも、常住に出來る事であるが、尙講演や講習などにも、機會を逸せず聽講するといふ事は、色々の點に於て有効なものである。

考へて見ると、家庭にとぢこもる事がつまらないとか、家事がうるさいとかいふ事は、結局自己の無思慮、淺薄の表現にすぎなかつた。どこにゐても、心のおき所、其の態度によつては、進歩もする、退歩もする。虛榮にかられて、無理をして都會に遊學し、「閨醜」文學者たらんよりは、無理のない自宅に止まつて、本氣で修養する方が、實質的に立派な女性となり、穩健な幸福な道を辿る事が出來るのではなからうか。只家に止まつては、周圍からの刺戟の少い爲に退歩し勝だから、合理的な方法で緊張を持續し、修養に努力すべきである。

第四編　婦人と結婚

一六　結婚に直面して

1　すべてはこれから

學校を出てから二三年の間、各自が思ひ〳〵の道を歩むやうになつて來たことは、此の頃の一般的狀勢であるが、その二三年の後に、或は又其の二三年の間に、兎に角直面せねばならぬ重大な問題に、私のこの小著に於ても直面することになつたわけである。職業婦人になるとか、高等教育に進むとか、家庭でみつしり修養するとかいふ色々の道程は、結局結婚生活を如何に幸福にすべきかといふ事の手段に外ならなかつた。さて、こゝで、貴女の過去の經驗・思索・修養の總勘定として、又結婚といふ、貴女にとつて劃時代的な生活の大轉化を境としての、將來の生活に向つて、最も愼重に考ふべき時が、いよ〳〵來たのである。

若々しい女性の耳に、結婚といふことばのひゞきは、一種いふべからざる諧調（ノロディ）をもつてゐる。其の響・新しい家——さては、出動・門送り・お出迎へ・手料理の晩餐・日曜の散歩・琴と尺八の合奏、何だか想像しただけでも樂しい、想像しただけでも妙に顏がほてつて來る。かうした樂しい空想に耽つてゐる時、針をもつ手に氣がついてハツとする。——

けれども、結婚といふ事は、結婚生活のはじまりなのである。結婚生活といふものは、定められた配偶者と、幾十年といふ長い〳〵一生涯を共にする生活なのである。結婚式をあげた頃の事だけを以て、結婚の幸福を想像して之に陶醉してゐてはならぬ。

世の中の經驗をつまない中は、物事の一面だけを一生懸命になつて考へてしまふものである。そして、すべてを美化する傾向があり、又時には一切をあぢきないものと見てしまふ傾向もある。結婚といふ事にしても、結婚當初の生活を只美しいもの樂しいものとのみ考へて、實際どんなものだか知らないまゝ、フラ〳〵と足をふみ入れてしまふものが、今日でも少くないやうである。貴女方は、もう相當な考はお持ちだらうけれども、未知の世界の想像といふものは、得て實際とはちがふ事の多いも

ので、殊に結婚の前と後とでは、非常にそのちがひが多いものであり、結婚當時と五六年後とでもい想像と實際と、理想と現實とではずゐぶんな差があるものである。ある女流教育家の話では、

「私の學校で、生徒が結婚について話してゐるのを聞いたことがあります。皆十七くらゐの子なのですが、まるで藝術的に考へてゐるのです。一人が『度々振袖が着られるやうに何度も結婚しよう。』といふと、又一人が『でも嫌ひにならなかつたら困るわ。家の母さんなんか、一度でまだ飽きないらしいわ。』『そのときはそれでもいゝぢやないの。』などと云つてゐるのです。」

「振袖が何度も着られる」は如何にも笑はせられる。無邪氣だ。いかにも無邪氣だ。振袖を着る結婚式だけが結婚といふ事のやうに思つてゐる。「一度だけど、まだ飽きないらしいわ」も、なか〳〵傑作である。どうか貴女も一度振袖を着たら、飽きないやうに、何度も何度も振袖を着るやうな不幸な目にあはないやうに、よく考へてもらひたい。

美化して考へるといつても、こんな例は、まるで何もしらず、知らせずに育つた未だ子供心の令嬢のいふ事だが、卒業してからだん〳〵考へて行けば、美化する度も低くなる事と思ふ。兎に角、結婚生活はどんなものかをよく觀てほしい。

電車に乘る。自分の席の側に、新調の洋服・美髯を貯へた若い紳士が、ゆつたりとをさまつてゐる。お隣に、大一番の丸まげ、赤いてがらの美しい人が、嬉しさうによりそうてゐる。車中の視線は皆そこに集中してゐる。二人は極めて幸福さうである。散歩に行くのか、三越に行くのか、とにかく樂しさうである。式をあげる前から、式の日から、新婚旅行の日からの追憶にひたりきつて樂しさうである。だが、私は、さういふ幸福な方々を見る時に、「これからだナ。」と思ふのである。

本當に「これから」である。結婚してからの經驗は、其の前のそれに比して、すべてが深酷になる。喜怒哀樂、すべてが強くなる。夫婦が互によく理解しあひ、體も丈夫、生れた子供もすく〳〵とよく育ち、頭もよく、入學難・修學難をも突破して、立派な學校を出る。主人の地位も旭日昇天の勢で躍進する。生活も豐かであり、災厄病難に襲はれた事もないといふやうな、幸運な人も、廣い世の中には、それはまあない事はあるまいけれども、大體どんな人も一度や二度は途方に暮れるやうな思をする事がある。はらわたをかきむしられるやうな苦しい事がある。試みに、家庭をもつて五年なり十年なりたつた人の經驗をきいて見るがよい。十中の八九までは、よくあの場合をきりぬけて來たものだといつたやうな追憶の材料を、二つや三つは必ずもちあはせてゐるに違ひない。妻は病床に臥し、兒は饑

に泣き、自分は會社を首になり、紹介所に日參してけんつくを食ふやうな人が、此頃の不景氣には珍らしくない。金もある、地位もあるといふ人が、第二夫人問題で家庭に悲劇を演ずるといふ事もよく新聞種になるではないか。或は夫の病氣、入院に、附添に行かうにも、小さい子供が三人足手まとひになる。やむを得ず、近所總出で加勢してやつとの事で看とりをするとか、妻が病めば夫は勤務を休んで、なれない炊事や洗濯をするなどいふ事もある。或時は眼の中に入れてもといふ程にいとしい子供が、ふと病魔に奪はれて、今までの快濶な人がまるで憂鬱になつてしまふといふ話もきく。夫に愛人が出來る。妻に若い燕がとまる。子供が不良で警察の厄介になる。妻を何度貰つても病死してしまふ。しかも名殘に一人づつ子供を產み殘す、三人三腹で折合が惡い。こんな事も聞かない事はない。或は地震や火事で丸裸にされる事もあれば、夫が勤め先から死んでかへつて來る事もある。商賣の手違ひから貧苦のどん底に陷るとか、ふとした事から惡い道にはいつて、暗い所へぶちこまれるとか、まあ數へあげれば、實に澤山のわざはひが世上に跋扈してゐるのである。あぶない思をする事に於て、大抵右にあげた何れかの縄目にかゝるのである。中には、そんなものには全然ふれない幸運の人もあるし、ふれても輕くすむものもあるが、又中には、此縄目を三重にも四重にもかけられる人だつて可也

あるのである。商賣の好景氣なるまゝに遊興にふけり、家庭のもめはじめた時に、財界急轉惡化して、財產は人手に渡り、債鬼は日夜踵を接し、愛兒は學校を中途で退學して奉公に出で、父はこの不運を苦にして發狂し、母は奔命につかれて病床に呻吟するといつたやうな事も、世の中に珍らしい事でない。よわり目に祟り目といひ、泣き面に蜂といふ惡運に際會せぬといふ保證は、決して出來ないのである。

要するに、結婚生活をはじめてからは、夫妻の兩者は勿論、愛兒の全部まで、生理的に波動がある。精神的にも雨風がある。經濟的にも變化がある。社會的にも盛衰がある。春風駘蕩たる中を、坦々とした大道に自動車を驅る、樂しい郊外散策のやうな氣分で一生を通る事は、殆ど不可能に近いと思はねばならぬ。雨があり、風がある事を豫定せねばならぬ。大暴風雨の襲ふ事も覺悟せねばならぬ。かういふ方面からばかり觀察すると、結婚式は正に受難の洗禮であるともいへるのである。私が「これからだナ」と思ふ半分は、この點にあるのである。さういはれると、「それでは結婚廢業だ」と即決したい人もあるかも知れぬ。そんなに結婚生活といふものが苦しいなら、何も好んで苦しい中にはいりこまないでもいゝではないかと思ふのは無理もない。むしろ獨身でゐた方がいゝと思ふのも尤もであ

る。けれども、大方の人は、受難の洗禮を敢へて受けようとする。艱難に會うても結婚生活を離れようとしない。そして又、獨身生活者は、人間として見る場合多くは毒身生活者になつてゐる。我々はそこに大きな何ものかがある事を直覺する。偉大な力の活躍してゐる事を直覺する。偉大な力！　先づ此の偉大な力の何ものであるかを知らねばならぬ。

2　結婚は自由か

良家の令嬢は、家の監督が嚴重である。少くも現在までは嚴格である。一人で外出する事も許されず、新聞や雜誌の小說などをよむ事も、活動や芝居を見る事も禁ぜられてゐる。だが、かうした家庭はだん〳〵舊式だとされるやうになつた。若しも奔放的な、放任的な家庭を新式といふならば、之は慥かに舊式であらう。新舊の問題はそんなに力瘤を入れなくてもいゝ事であるが、舊いものは皆だめで、無價値で、新しいものは何でもいゝと考へる事が實に大問題なのである。事實上、新式な家庭から不良な子供を產出し、舊式な家からは、善良な子供が出るのではないか。舊きもの必ずしも惡に非ず、新しきもの必ずしも善ではない。ともあれ、解放的な家庭に、きずものが多く出て、監督の屆い

てゐる所にはローズ物が比較的出ないといふ事は、本當である。して見ると、何か、令嬢方の中に、監督されねばならぬ何ものかの、あるであらう事がわかる。

所が、監督をやかましく云ひながら、兩親は頻に口をさがしてゐる。露骨でなく、上品な方法で、あらゆるチャンスをとらへて、我が娘の伎倆を示さうとしてゐる。片方に監督しつゝ、片方では宣傳するといふのが、年頃の娘をもつた親の心くばりなのである。そして、まちがひでもない中に相當な口を見つけて「カタツケ」てしまふと、親は一安心するのである。何だか、監督されたり、まちがひがありさうだつたりする何ものかを、年頃の女性が大分持つてゐるやうすである。兩親の心配はとても大變なものであり、「まちがひ」が其の子の將來に致命的なものであるだけ、其の「何もの」の正體をよく視つめておかねばならぬ。

抑々生きとし生けるもの〻、おしなべてもつ所の生命持續の欲求ほど、熾烈なものはない。植物も動物も、人間界に於ける文明も野蠻も、つまりは、生命持續の一點に還元される位、力がこの問題に集中してゐる。そしてこの生命を持續する努力は、榮養と繁殖との二大系統に向つて拂はれるものである事は前にも簡略にのべておいた。榮養は個體そのもの〻生命持續に必要のものであり、繁殖は、

個體の分化、永續の方法として出現したものである。生物が存續し、進化するのも、結局この二大系統の欲望を滿足せしめる事によつて行はれるのであつて、動物の如く心意生活をするものに於ては、榮養は食慾として現はれ、繁殖は性的欲望として現はれる。萬物の靈長を誇る人間にしても、食ふこと、生む事の二大欲望が中心をなして、之をあやなすもの、之に便益を與へるものが、つまり文明だといつてよいのである。で、食慾は生れ落ちると同時に發現し、何等教へられもせぬ中から、母の乳首を吸ふ事を知つてゐるが、性の慾は、十五六歳以後になつて其の現はれがだん〳〵はつきりしてくるのである。私がはじめに云つた愛情は、實はこの生物としての根本的な二大系統の欲望の一つなのである。

さすがは人間で、他の犬猫の如く、この欲望の表現を露骨にはしないけれども、欲望の存在は否定する事は出來ないし、又之は人間として最も根本的な使命を果すものであるから、注意の上にも注意して、之を善導せねばならぬのである。もしも、愛慾の指すがまゝに、放縱な行爲をなしたならば、到底人間としての生活は出來ず、社會からも擯斥されるのである。つまり幾十萬年來の人間生活に於て、次第に醇化され合理化されたものが、今日の結婚制度といふ結晶をなしたものであつて、すべて

の人は、結婚といふ社會一般の公認する慣習に到達する時までは、如何に愛慾が芽生えても、之を成長せしめずに、大切に擁護し、結婚生活に入つてからはじめて、此の愛慾の眞の滿足を得しめ、其の使命を果させるのである。だから、兩親の所謂監督といふのも、宣傳といふのも、其の心慮はつまり此の愛慾の擁護であり、善導であるのである。所が、年頃になれば、この欲望が發動的傾向を强くするので、何等かの機會を求めて外部に表はれようとする。脂粉を凝らし、美衣をまとひ、美の焦點になるのが滿足に思はれるのも、その一表現である。が、欲望が如何に存在してゐても、之に應ずる刺戟がない時には、其の力は案外微弱なものであるから、親たちが監督する事は、つまり此のめつたな刺戟に應じさせまいとする努力に外ならぬ。そこで、かうした時代に際會してゐる貴女方に於て、この事をよく認め、自らこの貴重なものを擁護し、善導するといふ事が、最も有効であり、最も必要なのである。親の監督は、此の理由を知らない時には、極めて窮屈で、何となく反抗的に出たい事もあるかもしれないけれども、眞理の前には、何人も叩頭せずには居られないのである。

愛慾——之を前の言葉でいへば種族保存の本能である。單に異性を欲するといふに止まらない。むしろ大きく見れば、異性を欲するのは手段となつて、其の子を生むのが目的となつてゐるのである。

當人は決してさう思はなくても、繁殖といふ生物發生以來の幾億年の欲求がさうなつてゐる。そして男性は之が原動力となり、女性は生み、生まれ來るものを哺育し行く使命をもつてゐるので、女性はもう之が本性となりきつてゐる。故に幼女時代すでに人形を愛玩して、母性愛の滿足を感ずるのである。世の母の子に對する努力を見る時に、不眠不食の努力をなしても、尙努力した事を認識せぬほどに徹底して居り、且つその努力の裡に、無上なる樂しみを感じてゐるのである。思へば恐しい力である。前に云つた結婚生活上の種々の悲劇もつまり榮養と繁殖の二大系統の不滿に端を發して居るが、しかも其悲劇の幕をとぢようとせずして、之を演じつゞける異常なる努力は、實に愛慾の力であり、女性に於ては、母性愛である。偉大な力の何者たるかは皆こゝに集つてゐる。この偉大な力をもりたてるものには幸福があり、この力に對する反逆は、不幸の源となるのである。そして、結婚生活はこの偉大な力を合理化すべきものであつて、この力を信ぜず、只結婚生活の雨風をきらふとか、又は何かの事情によつて、結婚を忌避しても、この力の反逆たる以上到底滿足な生活はのぞまれぬ。結婚する事は、自由である。しかし、この力を否定する事は自由でない。この意味に於て、結婚はどうでもいゝものでない。決して自由なものでない事になるのである。

3、眞劍な問題

結婚生活をつゞけて行く中には、だれでも、相當に苦しみや悲しみを味はふ事はある。けれども、結婚生活の基調となつてゐる愛の欲望が、前に述べたやうに偉い力をもつたものである以上、少し位の苦しみや悲しみは皆辛抱して行けるのである。辛抱しても其方が樂しみや喜びが多いのである。だから「これからだナ」といふ事は、嬉しいも樂しいもこれからだといふ事になるのである。

そこで、結婚生活をなすべく樂しみや喜びの多いやうにすると共に、出來るだけ悲しい目にあはぬやう、苦しい思をせぬやうにと、苦難を豫防し、苦難に備へる事がどうしても必要になる。それが即ち幸福をはかる所以となるのである。そこで、結婚はどういふ風に考へて、どんな風に運んだら最もよからうかといふ具體的な、眞劍な問題になつて來る。然り、眞劍な問題である。が、舊式の家庭では、なるほど前に云つた擁護と宣傳には力を入れても、當人に眞劍なものだといふ考へを起させなかつた。鎖國的狀態に當の本人をとぢこめておいて、兩親のめがねにかなつたもの、兩親に都合のよいものを本人に强制するものが多かつた。今でもかなりある。本人も親の命令にはしたがふのが孝の道

として教へらてゐるから、そして、結婚についてどんな事を考へて置くべきかを殆ど知らないから、従順な人なら其命令通りになる。けれども、兩親の考察點に若しあやまりがあると、其のむくいを受けるものは、本人である。喜怒哀樂の深酷な結婚生活に直面する本人は、どうしても自分で眞劍に考へておかねばならないのである。

で、從來から、婦人雜誌が色々計畫して、どんな配偶者を要求するかといふ質問を女學生に向つて發し、其答をかゝげる事がよくある。もとより結構であるが、結婚生活は一男一女の中心となり、一體となる生活なのだから、相手ばかりかう〳〵だと標準をきめても、自分に適當したものかどうかを知らねば結局破綻に陷るものである。故にまづ、自己を知り、自己の準備を周到にせねばならぬ。職業を求めるに自分の性格によく適合したものを選ばねばならぬやうに、配偶者を選擇するにも己に最もよく適合するものを求めねばならぬ。故に己を知り己をみがく事を第一とし、之に基いて配偶者を理想的に定めねばならない。理想的といふ事は必ずしも高い理想といふのではない。最も適當といふのが理想的といふ事である。何しろ二人が一緒になつて、食衣住を營んで行き、子供を育て、教育して行くのだから、收入も考へねばならないし、職業によつて家庭の生活樣式がどうなるかも考へておくべき問題である。それから又子供を欲するといふ本質的な問題から、遺傳といふ事も重要になる。

かうして色々の要件を研究して、さていつ頃が最も結婚期として適當であるか、生理上からも心理上からも、其人の特殊の事情からも考察すべきであるし、さうして、愈々結婚の理想がきまつたとして、之を如何に實現するか、自由結婚がよいか、媒酌人まかせがよいかなど思へば、隨分色々な問題がある。で、かゝる種々の條件を一々よく考へて、出來る限り合理的な結婚をするといふ事は、つまり結婚生活に於ける樂しみを增し、苦しみをさける所以であり、喜びを多くして悲しみを少くする所以である。かうして、準備周到な結婚生活にはいるといふ事は、貴女自身の幸福の基である事はいふまでもないが、夫や愛兒の幸福の土臺であり、自分の兩親や一家の仕合せの元であり、つもりつもつて、社會國家の安寧幸福の源泉となるのである。だから、結婚について貴女自身がよく考へる事は、眞劍に思索する事は、決して自分一個の爲のみではないのである。只恥かしい事として冥々の裡に悲つて終つては、可惜幸福の玉を逸する事になるのである。もしそれ萬事をつくして、尙結婚後の悲運にあふかどうかの危惧は、もはや運命の問題である。さうした事は天にまかせ、己の出來るだけの努力をこの一點の爲に拂はねばならないのである。

一七　結婚の準備

1　自分が主・臺

結婚の準備といへば、式服・箪笥・長持、さては披露式のお献立といふやうな、物質的なものだけを意味した事はもはや古い話になつた。今の時代の人は中々眼さめてゐるから、さうした事のみを準備と考へてはゐないやうである。けれども、結婚しようとしてゐる人の頭が如何に進んでゐても、我國の長い間の習慣や、家族制度、之に基いた法律などからして、どうしても親達の考では物質的な方面が此の問題の主要部分を占めてゐるので、親達に、時代に呼應した精神のない限り、準備といふ事にも、新時代らしい要素が稀薄になつてくる。

日本は家族制度の國である。近頃はだん〳〵其の制度がくづれかゝつて來てゐるけれども、思想的にはまだ〳〵つよい力がある。殊に結婚問題に關係すると、「家」といふもの、家門といふものを尊重する方面に、異常な注意が拂はれるやうになつて、結婚といふ事にさう大した關聯をもたない事でも、

家を本位にして力こぶを入れたがるものである。だから、結婚といふ事には、成るべくいゝ家柄と縁組したいといふ事が生じ、結婚式は一生に二度だからとか、自分の家としては相當な規模や支度が必要だとかいうて、現在の經濟的事情を土臺にせず、虚榮的に、無理な才覚をしてまでも、物質的な結婚準備をするものがある。之は正に結婚の準備といふよりは、むしろ結婚式の準備ではあるまいか。結婚の準備は、果して結婚式の準備であらうか、將また結婚生活の準備であらうか。

云ふまでもなく、結婚生活の準備でなくてはならぬ。結婚式の準備も必要でないとはいはない。猫の子一匹をくれるのでも、經節一本は要るのだから、大切な子供を長年養育してよそへやるといふのに、相當な支度のいる事はあたりまへだけれども、結婚生活の準備を等閑に附して、結婚式の準備あみに熱中する世の親たちは少し考へねばならない。とても壯大な結婚式の下に出發した人に、家庭生活の破綻が往々生じ、みすぼらしいなりで、質素な擧式の下に結婚生活のスタートを切つた人に、惠まれた家庭が與へられる事の多いのを考へねばならぬ。然り、結婚の準備は、結婚生活の準備であらねばならぬ。

動物が雌雄的生活をするには、殆ど無準備である。其時期も極めて短い。夫婦關係が確立してゐな

い。人類にしても、野蠻民や野蠻な時代には、準備といふ事は必要がなかつた。亂婚といつて、だれの夫にもなり、だれの妻にもなりした時代には、夫婦和合も、一家の活計も考へる必要はなく、したがつて、其の能力をもつ事は結婚の必要條件ではなかつた。考へやうによつては、一女を多數の男子が爭ふ時の體力知力といふものが、要件となるから、之を準備といへばいへるけれども、今日の所謂結婚生活の準備とは、相を異にしてゐる。人類はその後一夫多妻をへて一夫一婦を正常なものとする迄になつた。一夫一婦が同心協力して生涯を共にするといふ結婚生活には、可也長い準備がいる。きめた以上同棲した以上、一生を共にするといふ事になれば、夫妻兩者の能力素質等について準備が長くかゝり、複雜な要素をもつて來る。

だが、同じ人間でも、其の境遇によつて、準備の出來ない人がある。小學校を出るか出ないかで、女工になり、其勞働賃金を皆親に提供して、裁縫も料理も出來ないまゝで、妻になるといふやうな人もある。之に比すれば、高女四五ヶ年の教育をうける事の出來た貴女方は、つまり結婚生活の準備として、立派なものといはねばならぬ。乍併、高女教育のみを以てしては、家庭の人としての準備は不十分であると、一般にいはれるやうになり、從つて、高等教育に進まうか、職業につかうかといふ事

も起つて來るので、之等については、前に夫々の項目の下に考をのべて來たわけである。

だが、職業生活には、又それ獨特な目的があり、狀態があるので、之が結婚生活の準備として適當な部分と不適當なものとがあつた。高等教育にしても、之を受けた人が結婚を忌避し、又は結婚難に陷り、出產難・育兒難になやむといふ事もあるので、結婚生活の準備といふ事のみの目的で、職業があり、高等教育があるのでもない。だから、結婚生活といふ事の準備としては別の方面から、考へて見なくてはならぬ。

結婚生活の準備の一として、世の未婚婦人は理想の夫をもとめようとする。が、前にも云つたやうに、己の川意がなくして徒らに理想の夫を求めても、完美を期しがたい。己の能力の修養を土臺として、之の上に理想の夫を定め、確固たる家庭生活にばいらねばならぬ。故に、結婚の準備は結婚生活の準備であり、其の基底は、自己の土臺の建設にあるといはねばならぬ。土臺の建設、それは如何なる要素によつて構成されるであらうか。

2　土臺の建設

結婚してからは、喜怒哀楽が深刻になると云つておいた。なるべく喜び楽しみを多くし、困苦悲哀を少くしようとする事が、つまり土臺の建設なのである。結婚生活を貴女個人だけについて考へて見れば、結局貴女の心と體とを、適當に活動させ、其の機能を十分に發揮させる事に外ならないのだから、まづ消極的には、其の生活に障害となる部分をなるべく結婚前に除去し、積極的には、其の生活を充實させるに必要な能力を蓄積する事が肝要である。

心身方面に於て、結婚生活に障害となる事といへば、體の本來の生理的缺陥・病氣、心の方では、家庭の人として不向きな性格である。人間は體に弱點があると、そこが病氣の元になる。心に缺點があると、そこが失敗の因になる。故に各自の心身を顧念して、この弱點を芟除しておかなくては、折角の結婚生活にひゞが入りやすいのである。

積極的方面で第一に力を入れねばならないのは、健康の保持といふ事である。體がよわくてはたまらぬといふ事は、誰も知りすぎるほど知つてゐる。けれども大病に會はない人は本當には解つてゐないので、不養生をしがちである。まして積極的に頑丈な體格をとは心がけない。所が結婚生活は生理的に可也な大變化を來すものであり、殊にお產といふ女の大厄をひかへてゐるので、お產の前後の養

生と、本來の體質とによつて、それ以後の健康がとかく問題を起し易いものである。婦人病といふものが、結婚後に於て起る事が多いのは衆知の事がらである。近頃は女學校の體育が盛になつたから、體の鍛へ方も立派になつたであらうが、私たちの同窓などで見ると、男でも、野球や徒歩のチヤムピオンなどが、卒業して二三年の中に死ぬものが多かつた。鬼をもひしぐ田村磨式の體格の人が肋膜や肺結核にかゝり、在學中ヒョロ〳〵してゐたものが、案外丈夫でゐるといふ例が澤山あつた。之は運動家として筋肉組織がさういふやうに出來てゐたのに、生活の急變により、運動不足といふ事から、體の急激な變化を來した爲だと思ふ。この事は女性についても同じ注意が要るのである。健康を保持する事は美の存續の基礎であり、健康を害ふ事は、夫婦愛の決裂に至大の關係があり、幾年が間病床に臥すとか、若くして、子を殘して夭折するとかいふ悲劇を思へば、健康は準備の第一であり、土臺建設の第一要件といふ事がいへるのである。

次には主婦としての本當の職能と考へられる家事的方面の熟練が大切である。前述の如く近頃は、女子の社會的活動が一種の流行になつた事から、とかくお勝手の仕事や裁縫などを輕んずる風潮が大分濃厚になり來つたけれども、女性が勝手をすてて勝手な事をやるやうになつては、之は亡國の徵だ

といつてもよい位恐しい事ではあるまいか。前にも云つたやうに、人類の二大欲望としての榮養と繁殖は、其の中心を家庭におくのであつて、其完全なる滿足は、一に主婦の努力にあるのだから、主婦にしてこの方面に通ぜず、又不忠實であつたならば、決して滿足な生活は送れるものではない。「妻の手料理」は新婚生活に於て最も樂しい一つであるが、けふもあすもコロツケばかりでは手料理も鼻についてしまふ。とはいへ、手をかへ品をかへてお氣に召すやうにするには、經濟といふ事も考へなくてはならぬ。餘裕の少い家庭では出來ない事である。そこに、料理通としての貴女の手腕を發揮し、簡易でめづらしい、しかも榮養たつぷりなものを調理する必要が生ずるのである。

近頃の女學生は、高等教育熱にうかされて、語學などに力を入れる事から、裁縫をきらふ。必要な時には仕立屋に出すといふ。が、家庭をもつて、横文字にしたしみ得るやうな奥さんが、だらしのない着物をきせた坊やを連れてゐるのを見ると、あまりいゝ氣持がしないものだ。針をもつ事に興味を有し、億劫がらぬ迄にはしておかないと、一家のものにきちんとしたなりをさせる事が困難になる。料理と共に、決して等閑に出來ぬ問題である。

結婚生活にはいつた婦人は、こゝに一家の大藏大臣となるわけである。大抵の家庭が財產からの收

入か職業からの收入か又は此の兩方のみいりでやつて行くのであるが、とにかく收入を以て一家の生計を維持し、萬一のそなへに貯金や保險料も出さねばならぬ。家庭生活の一番の苦しみは、この所謂「しんしやうもち」にある。主人の收入は、結婚當時は二人で使ふ事になるが、子供が二人になり三人になりすると、收入を分子とし、人數を分母とする其の分母がやたらに大きくなる割に、分子の方は增大しない。そこで一人あたりの購買力がへる。しかも子供が大きくなるとます〳〵錢の使ひ道が廣くなり多くなる。「やりきれない」の嘆聲が洩れて來る。食料・家賃・被服・教育・交際其他數多い出費をあげたてると、とても晴着どころでなく、遊山に出るどころでなくなる。父は疲るゝ、母はやつるゝの生活がだん〳〵深酷になる。結婚當初の愛の感情生活は、やがて錢の勘定生活に變化してしまふ。そこで、家計維持に巧拙が出來て來る。同じ收入で贅澤もせぬのに貧乏してゐるものもあれば、らくらくと要領よくやつてゐる人もある。經濟的にだらしのない妻、三杯の飯を二杯にもしたいケチ〳〵、色々あるが、活動の基は榮養を主とした食衣住の滿足にあり、其の費用を出した上に、社交費にも惜しまぬといふ事には、可也な修練が必要になる。そこで、結婚前の女性が一家の家計をもつ練習をするといふ事は極めて必要な事である。

苦しい家計をとつて行く時にたしまへになるのは職業からの收入である。女性の職業をもつ事には利弊相伴なふものである事は前に縷述した所であるが、兎に角女性はどんな人と家庭をもつかが不明であり、結婚生活上、どんな時に自ら働かねばならなくなるかも解らないのだから、職業能力をもつてゐるといふ事は、土臺の建設上重要な事であり、結婚の準備としての必須な要素といはねばならぬ。それにつけても尙男子の職業といふものについて、大體の知識をもつ事が、配偶者選擇上必要になる。これは次の章でのべる事であるが、夫をえらぶには、どうしてもなくてはならぬ一つ主要知識である。

體が丈夫で、家事的手練もあり、家計維持能力や職業の腕もあるといふ事になれば、結婚生活は平和だと見てよからうが、尙一つ加へたい事は趣味の問題である。

人間は何かの慰安を求めるものである。職業上の活動がはげしければ劇しい程、慰藉を求めることも大きいので、家庭の人が之を與へる事に不忠實ならば、勢ひ其の慰藉を外に索めるので、家庭の圓滿はそこから崩壞されて行くのである。で今では、琴・三味線・花・茶などを始め、洋樂の方面にも或度までの修業を必要としてゐるのである。が注意せねばならぬ事は、之等は藝術的なものだから、凝り出すと、本職を抛つてまでも熱中したくなるので、慰藉といふ目的をも忘れ勝になる事である。

以上は結婚準備の必要能力をさま〴〵の方面から見たのであるが、之等の諸能力を發揮する原動力となるものがなくてはならぬ。即ち道德的な力である。

第一に家庭生活では、妻に誠意がなくてはならぬ。夫婦の心が一體となる。ピツタリするといふ事には、お互の心の中に虛僞があつてはならぬ。誠意に充ちてゐなくてはならぬ。如何に他の諸能力があつても、誠意なき夫妻の生活に、濃厚熱烈な愛は期しがたいものである。

誠意のある所には同情が必然に生じる。家庭生活には、前述の通り、雨もあり風もある。主人が職業上社交生活上に苦しい立場にたつ事もある。にがい經驗をなめる事もある。嬉しい事もある。その時に、悲喜共に之に同情する所に、結婚生活はすこしのゆるぎを見せず、しつかりした愛の殿堂が建設されるのである。

家庭生活といふものは、用事のないやうであるものである。心のせはしいものである。が、やりやうによつては、放擲してもやれぬ事はない。そこで、勤勉か怠惰かが家庭の色調を種々なものにする。夫に對し、子に對し、他の家族に對して、誠意があり、同情があるならば、料理でも裁縫でも洗濯でも、其他收入を得んための仕事でも、骨身を惜しんでは居られないわけである。かうしたこま〴〵の

仕事は、結局道德性の表現だから、愛の心の一ばいな時には、勤勉なものである。勤勉な程度が、愛の程度と一致するといふ事もいへるであらう。

しかし、困る家計をたて〻行くとか、主人の心をとりなほすとか、其他、長い一生の間には、つらい事が可也あるものであるが、其の風雨の中を通りぬける忍耐力がなくてはならぬ。愛の繼續といふ事は、一面根氣の仕事である。一寸したいさかひによつて、思切つてしまふやうでは、いかなる人を夫にしても、幾人、夫をかへても、滿足は得られぬ。忍耐も亦必要な動力たるを失はぬ。

親しい中にも垣をせよといふ事は古人の云つた事であるが、夫妻の心が一體となる場合、馴れるに從つて狂れたがるものである。男女の社會的地位が近頃變化して來てから、妻の夫に對する態度が著しく尊大になつたではなからうか。何となく、主人を尊敬する事が少くなつたのではなからうか。あまり親しい友だちのやうな口のき〻ぶりをするといふ事は、はたで見てもい〻ものではないが、兩者互に人格をみとめ、禮讓をそなへてゐる夫妻を見ると、如何にも胸のすつきりする思がある。殊に夫妻だけの二人の生活に於ては、禮容を保持する事が必要である。あまりなれすぎて作法に叶はぬ所業に出ると、つもりつもつて、妻への幻滅を構成するものである。どんな時でも、敎養ある婦人として

の品位をたもつといふ事が肝要である。

以上、土臺の建設として、消極・積極兩面の要素について述べ來り、之が動力としての道德的必要項目についても說いた。之等を經とし緯として、結婚前に修養をつむ事が本當の結婚の準備である。もしそれ、所謂支度の問題に至つては、末の問題である。が之とても、式の準備でなく、結婚生活の準備と考へて、結婚後有用な調度をと〻のへるといふ事を主にせねばならぬ。かうして、眞の結婚の準備が出來たとする。さて、いつ頃結婚する事にしたものであらうか。

3　スタートに立つ

愈々スタートに立つてもよい用意が出來た。いつ頃おめでたい事になるかといふ問題。之は國により、地方により、境遇により、又其人の考によつて色々の差はあるが、結婚生活そのものが、心と體との全幅の活動を要するものなのだから、活動能力の最もよく發現する頃を以てスタートを切るのが、一番い〻わけである。早くてもいけない、おそくても困る事がある。適當な時期を考察しておいて、それまでに準備を周到にする必要がある。

印度は早婚で有名な國で、十二三歳でもはや父たり母たる者が珍らしくない。バラモン、クシヤツトリアの種族では、女子の青春期以前に結婚式をあげ、之におくれるのは罪つくりだといふやうに考へてゐるので、三つ四つの時に許嫁が出來、十臺の時に未亡人があつたりする。

日本でも、比較的開けない地方では、はたち前に大抵かたづく女性が多い所もあるが、近頃はだんだん晩婚になつて來た。さて、統計では、何歳位が最も多いであらう。

男子は明治時代からずつとつゞいて二五歳以上二九歳のものが一番多く、次が二〇乃至二四である。女子は二〇—二四のものがやはり多數で、一五から一九までのものが之についでゐるが、男子に於ては、二五—二九の增加率が、二〇—二四のそれよりまさつて居り、女子では二〇—二四が一五—一九のそれよりまさつてゐる。だん〳〵晩婚になるのが、文化の進歩と一致する事になつてゐる。だが、統計は、婚姻届出の日を起算點とするのに、届出は實際の結婚の日よりも遙かにおくれる事が多い。內緣の時代が如何に長くても統計面には表はれないから、もつと早いと見てよいわけである。女子としては此頃では十八歳頃から二十三四といふ所までが普通である。高等教育が女子にも盛になり、職業婦人が多數となるに從ひ、又生存競爭がはげしくなるにつれて、婚齡は次第におそくなり行く。そ

れでも先進文明國に比べるとまだ早い。

結婚平均年齡

	男子 年	女子 年
英國	二五・九四	二四・六九
佛國	二八・四一	二五・三二
獨逸	二八・九〇	二五・七〇
ベルギー	二九・九四	二八・一九
オランダ	二九・一五	二七・七八
ノルエー	二八・五一	二六・九八

之ではまづ安心である。之は數へ年にして見ると、男は卅歳か卅一歳、女は二十六七といふ平均だから、日本の現在の如く、廿五といふと、お婆さんの聲をきくに比して、此平均は日本のよりずつとおばあさんになつてゐる。

だが、早い晩いといふのも、一般に其時代の習慣によるのだから、どの年から以下が早婚ともいはれず、何歳なら晩婚ともいへないが、女學校を出ない前の年頃では、まだ早婚といつてよからう。早

婚者は、修養の期間の短い爲に家庭の人としても何かと缺陷が多いし、子供も健全に行かぬ。しかしあまり晩婚になると、心理的にも缺陷が多くなり、生理的にも分娩が困難になる。二十五歳迄は難產率は少いけれども、その上になると、率が增加し、母體や胎兒を危險にするとか、產褥熱にかゝる事も多いといふ事である。

近頃の世の中は、何もかも過渡の時代だから、所によつては早くかたづけないと、賣殘りになつて、世間の物笑ひになるといつて、親達がヤツキとなる地方もあるし、職業にたづさはつてゐてその年頃も、知らず〳〵に通るといつたやうにさま〳〵の狀態になつてゐる。けれども、女性は、適當な年にかたづかないと、その後にいかに立派な資格や實力がついても、年がいきすぎてゐるといふ事が疵になりたがるものであるから、潮時を考へておかなくてはならぬ。しかし其潮時も、準備の出來ない時に來た潮時では悔を後に殘す事が多い。急いで結婚すると、ゆる〳〵後悔する事になり勝である。結婚生活への修養が出來た時に得られる機會が何よりであるから、所謂結婚準備は、永くかゝり、女學校を出た以後、高等教育や職業につくものでない限り、何時ロがかゝつても困らぬだけの用意がほしいものである。結婚後に修養する事は差支へないが、學問的な事や、技術などは、家庭にはいつた後

はまづ出來ないものとしておかねばならぬ。

一八　好配偶

1　魅せられる者

私は男子の一生に大切な時期が二度あると思つてゐる。其一つは職業を決定する時で、他の一つは妻を迎へる時である。これから先の世の中では、何人も職業によつて社會に貢獻し、自己を保つて行く必要が大きくなつて行くので、どんな仕事を選んだらよいかといふ時が、將來の幸不幸の岐點ともなるのである。が進んで貢獻生活を充實し、自己を發展させるに重大な關係をもつてゐるものは家庭であるから、其家庭の良否を決定する妻の選定といふ事に、將來の成敗が至大な關係をもつ事はいふ迄もない。

從つて、婦人が家庭にはいるに方つて、よい配偶者を求めるといふ事は、男子の爲に重大な運命の決定となるのである。所が、婦人の一生としては、配偶者の決定期が唯一の大切な時期である。婦人

も職業をもつ傾向はます〳〵強くなつて來たけれども、女性本來の仕事は別にあるのだから、どうしても本來の仕事即ち家庭の主となるに際しての運命の岐點が、一番一生に於て大事な時なのである。だが、惜しい事に悲しい事に、此の重大な時が、如何に輕卒に扱はれて來た事であらう。如何に簡單に考へられて來た事であらう。少くも新時代に生まれ、新時代の教養をつんだ貴女としては、よほどしつかりした考をもたなくてはならない。眞劍に考へ給へと私は云つた。しつかりした土臺を建設せよと私はいつた。眞劍に考へ、確固たる土臺を建設すればするほど、配偶者の選擇に力を入れねばならないわけである。

所が、我國では、家族制度である爲に、結婚とは家同志の緣組であつて、一男一女を本質的なものと考へてくれない。本人の口だしを喜ばぬ。女に於て殊に甚しい。當の女性が、何かと理想をのべたてれば、「女のくせに」で排られ、「今の女は生意氣だ」と叱られ、何でも與へられた口で盲從しなくてはならぬ。かうした傳統的な思想は、それでも近頃は隨分うすくなつて來たけれども、まだ、當人の意志や理想を本據とするまでに至つてゐない。これは、當人に理想がしつかり出來るやうな教育も授けられず、出來るやうな機會が與へられないから、自然其の知識もなく、理想も架空的にならざるを

得ない、從つて長上の考も入れねば成立が困難になるからである。

色々の理屈はさておいて、女性は男性のどんな所に魅せられるか。この「魅せられる」といふ事が、配偶者選定上にかなり重要な地位をしめてゐるものである。其の正當か否かは別論として、とにかく力のつよいものである事には異論がない。

端的にいへば、男子は女子のやさしさと美貌を望み、女子は男子の勇氣と智惠といつたものに憧憬するやうである。男性は女らしい女性を、女性は男らしい男性を望むのが、當今の通有性である。然り、女性は男子の男性美に魅せられるものである。

人類の原始時代には、女の方が社會的勢力の中心で、男子は體も小さかつたけれども、男子が經濟力を把握し、女子が其財產の一部の如くなり、玩弄的な地位にあつて幾多の年數をへた。其間に於ける女性の男子に對する理想は、雙性豐な男性にあつた。力のつよい、體のがつしりしたやうな男性が女性のあくがれの的であつた。時うつり星かはるにつれて、人間の生活樣式が變化し、腕力の時代は腦力の時代に變つては來たけれども、尙この體格の立派な、野蠻性をもつたやうな、少くとも、纖弱さを有せぬ男性は依然として女性の注意をひくに十分である。かのスポーツマンなどに渴仰し、芝居

の荒々しい男役の俳優にあくがれをもつ女性が少くないのも故あるかなである。

けれど、近頃は文藝がさかんになり、之に熱中する女性は、作家などに共鳴するものも多くなつたやうである。其他何に限らず、共鳴といふ事が、理想の全部として考へられて來る。勿論共鳴といふ事は必要な事である。けれども、生活の實相はずゐぶん複雜なものだから、他の條件を色々考慮の中に入れなくては、折角の結婚生活も永續性がなくなるといふ危險がある。眞實な生活の道を辿らうとするまじめな女性としては、好配偶を得る爲に、望ましきものを更に〳〵色々の點から考へておかねばならぬではなからうか。

2　望ましきもの

家同志の緣組といふ時代には、家柄や財產が一番重要であつた。家が緣組をするのだから、い丶家柄を要し、財產のあるものを要する。しかし、結婚はそんなものではない事勿論であり、將來の社會では、それ以外の重要なものが漸山要求されるのである。にも拘らず、いさといへば家柄といふものが可也有力な要件に、ハタから力づけられる事が多い。三上於菟吉氏が東京日々新聞へ連載した小說

「日輪」に、

「じやあ、お母さま、中條さまがどんなにすぐれた方だと仰有るの！」

「そりやあ貞雄さまがどんな方か、底の底はまだだれにもわかりはしないさ。しかし、貞雄さまには家柄といふものがあるのだよ。公卿華族の中でも、指に折られる中條家なのだから、その後光があの方のまはりにはちやんと射してゐる。だから、あの方が、たとへ城木と同じやうに意氣地なしでいらつしやるにしても、世間ではさうは思やしない。家柄や門閥の尊さはそこにあるのさ。あの方は、うちへお婿入なされば、三年とたゝない中に貴族院議員におなりになる。あの方の家柄と、うちの財產と一つにすれば、世來ない事はこの世にありはしない。お前だつて、さうなれば、一流の貴婦人だよ——ねえ、もう下らないわがまゝはいはずに、さあお化粧をして着かへて頂戴。そしてお約束の一時までにお屋敷へ伺はなければ——」

もとより小說だ、作りものだといへばそれきりだが、この中には、新舊思想の鬪爭も見られるし、長沼といふ成上り富豪の、家柄尊重がよく描かれてゐる。德惠子は城木といふ、うちの書生からしあげた法學士の人物にあくがれて、中條貞雄の人物を問題にせず、兩親は、秀才法學士たる城木を、門

番爺の子としてさげすみ、人物よりも家柄を希求してゐる所に、悲劇がかもされてゐる。過渡の時代、この小説に似た事實は世の中に珍らしくない。只、このヒロイン德惠子のやうに、家をとび出して、どんな誘惑にあつても、日輪の如く強く生き得る女性は少いであらう。とにかく、結婚生活上、本質的なものを配偶候補者に見出して、その所有するものを索めねばならぬ。夫たるものにのぞましき要素、それは果して如何なるものであらうか。

第一は體の問題である

前にも云つたやうに、結婚生活にはいつてからは、夫妻の同心協力によつて、子女をあげて教育し、一面社會につくすのであつて、以後幾十年の長い間丈夫な體を維持するといふ事は、どうしても生活の第一基底である。故に自分の健康であると共に、夫の頑健でなければならぬ事はいふ迄もない。如何なる心の持主でも、故障があれば、心の生活は健全をかき、圓滑な生活が破壞される。兩親の健否は、生まれた子供の健否に關係する。結婚生活幾十年は、活動の中に送つて、經濟生活の維持、教育等をなさねばならないので、收入を得る爲にも體の丈夫といふ事が第一になる。一家の主人公の健否は、かゝつて一家の運命を支配するのである。

氣の毒なのは、主人の病氣を妻の負擔する事である。立派な支度で嫁いた評判の美貌の人が、結婚後幾年もたゝぬ中に、まるで見違へるやうな顏立になり、病毒が手足に出た爲に之を切斷するなどといふ不幸なものがある。さほどでなくても、主人のわるい病氣の爲に、愛兒をもうける事の出來ない人もある。結核に感染して夭折する若妻、婦人病になやむ夫人、それらが結婚前には健康だつた體に、新に植ゑつけられたものであることを思ふと、配偶者の健康問題が一層切實なものになる。

そこで、實際問題としては、先方の健否を如何にして知るかの問題になる。ごく新式の方法では、双方が體格檢査書を交換するといふのがある。いゝ方法である。けれども、今日の習慣としては、あまり犀利な眼で相手方を見ようとする時には、えて話がまとまらぬ事もあるので、さう科學的に立入りがたい困難がある。やむを得ず、知り得る限りの事情を調査するより外はないであらう。

第二は遺傳の問題である

遺傳の問題は、一面健康の事に關係し、他面に知能の事に關係する。生物學的に見た結婚の目的は、優秀なる次代の建設に存するので、丈夫な、そしてあたまのいゝ子供を得るといふ事は、夫妻の最も要望する所となるので、遺傳はこの點に於て大いに研究すべき問題なのである。

遺傳の何物たるかは、動物學などで大體承知と思ふから、其の說明は割愛するが、通常の意味に於ては、遺傳を消極的に解して、惡い疾病の遺傳をさけようとする時に用ひてゐるやうである。即ち、精神病系統では所謂精神病・癲癇・低能等があり、結核系統の諸病・癩病など、遺傳よりも傳染病として恐れられてゐる。遺傳するものは、必ずしも親から子へと行くものでなく、時には數代潛在して出現する事もあるから、調査が困難である。傳染病で遺傳的に考へられてゐるものに、結核・癩の外、花柳病がある。くはしい事は結婚醫學の諸書の研究をおすゝめするが、とにかく、かういふ惡いお土產をもらつたとすると、子孫に累を及ぼすのであるから、十分注意せねばならぬ。候補者相互の一家が古くからよく解つてゐる所ならば、大概推定出來る事でも、近頃のやうに、北海道の人が鹿兒島のものと緣組をするやうな時代に於ては、此の調査は可也困難である。興信所あたりに賴むと色々しらべてくれるけれども、之とても、信賴の度は問題だらうと思ふ。

以上は病氣の方面だけをのべたのであるが、積極的な方面で最も大切な事は、知能の遺傳である。世間の人は、血統を云々する時は、主として此の遺傳的疾患ばかり氣にとめるけれども、優良な子女を得るには、優良な系統から配偶者を得ねばならぬ。有名な遺傳の例がこゝに二つある。今から二百

數十年前、米國にエヂヰス、クツトルといふ婦人があつた。彼女は英國の貴族の子孫で、體も丈夫、意志の强い美人であつた。此人はリチヤード、エドワードといふ法律家と結婚し、一男四女をあげたのであるが、何かの事情で離婚になつた。エドワードは、メリー、タルコツトといふ平凡な女と結婚して數人の子をあげた。後妻の子孫には一人として中以上のものはなくて、平凡ぞろひであつたが、先妻の出は皆優良兒で、男子の方の子孫中、今日迄知られてゐるものが合計千三百九十人もある。その中大學を卒業してゐる者が二百五十人、大學總長が十一人、大學教授が六十五人、醫師が六十人、著名な牧師が百人以上、陸海軍人七十五人、文學者が六十人其他多數の法律家等を出し、副大統領が一人出てゐる。

東洋にもかゝる例は少くない。釋迦の祖先は王であり、孔子の祖微子啓は殷の紂王を諫めた賢人だつた。書道の大家王羲之は王陽明の先祖であり、學者朱子の父は亦學者であつた。我國に於ても、空海は大伴氏を祖とし、遠祖野見宿禰の裔なる菅原道眞は四代も續いた文章博士の家に出で、父是善も學者だつた。賴山陽の父春水、祖父杏坪、皆學者・名筆として聞え、林家の羅山・春齋・鳳岡、伊東仁齋と東涯、近くは箕作玩甫氏の三人の女子中、長女からは統計學の大家吳文聰、醫學博士吳秀三が出る、

次女が蘭學者菊地秋坪に嫁して、菊池大麓、箕作佳吉・箕作元八の三兄弟三博士を生んだ。優秀な親からは優良な子が生まれるのである。

所が悪い方で有名なのは米國のジュークといふ大酒家でなまけ者、之がよくない女との間に生んだ子孫、九代目までに二千八百人。その中三百人は子供の中に死んでしまつた。三百十人は貧民で養老院に入り、四百四十人は酒飲で不良の徒となり、女子の過半數は賣春婦、百三十人は刑事上の犯罪人、二十人は窃盗、七人は殺人犯、たつた二十人だけ正業についたが、十人は監獄に行つた。ジュークの子孫の爲に政府の支出した金額は、二百五十萬弗だといふ事である。

かくの如く、優良な親の結婚によつて、優秀なる子をあげ、之を立派に教育すると共に、悪疾をもつたもの丶結婚を禁止して、劣悪な人間の増加をふせぐ事は優生學(Eugenics)の目的とする所であるが、配偶者を選ぶに當つては、優生學的な考が極めて必要である。

遺傳に關聯して大切な問題は血族結婚である。法律もゆるし、普通に行はれてゐるのは從兄妹同志の結婚である。知らない土地、知らない人と緣組をするのは何かと危險が伴なふので、親同志が兄弟關係ならば、幼少の時から、巨細の事情が明かだから都合がよい。けれども、血族婚姻は、一般にな

くないとされてゐる。醫學の說く所では絕對に悪いといふのではない。双方の缺點も長所も強く遺傳されるといふ事があるのである。よい點が兩方に澤山あれば、遺傳質もよく現れようけれども、よい點と共にわるい要素も知れぬ中に強く表現するとなれば、危險な話だ。

第三は處世能力の問題

夫としてもとめる所は、人格だとか學識だとか、又職業の如何など色々わけて考へられるけれども、之等は一體となつて處世能力を構成するものであるから、一括して考へて見たい。

まづ腹をきめてかゝらねばならぬ事は、これからの人間はさうえらい立身といふ事が出來なくなるといふ事である。明治の初年頃のやうに、仕事が多くて人材の少かつた時代は、學校を出たといふ事が唯一の資格で、トン〳〵拍子に成功も出來たけれども、近頃では、教育ある人間の生產過剩に陷つて、競爭がはげしくなり、且つ社會組織がすつかり固定的になつてしまつたので、一足とびに優勝の地位を占めるといふ事がとても困難になつて來た。行政官にしても、軍人にしても、其他實業社會に於ける職業にしても、香のまはつて來るのをまつて、一歩々々上に進んで行くといふのが通常のすがたであつて、同一の階級に居るものが澤山になつて來たから、どん〳〵新陳代謝が行はれるので、大學を

出て行政官になれば、だれでも知事になれるとも限らぬ。途中に幾人かの行路病者がある。

かういふ永い社會生活の間に、失敗もなく、だん〳〵に向上して行くといふ時、其根底をなすものは、一に人格であるといはねばならぬ。人格が立派な人は社會的に信用がある。信用は社會生活の最も大なる船である。人格の羅針盤の指す所によつて、船は大なる波濤をついて、行くべき所に航海し得るのである。

而して、人格といふものは、修養する事によつて立派になるので、教育の程度といふ事が、之の或度迄の推定標準になるわけである。今日では實力の世の中となつたやうであるが、やはり教育の高下が社會生活上の地位に於ける標準となつて居るので、人格と教育の程度といふ事は配偶選擇上の重要項目たるを失はない。しかしながら、社會的生活をなす實狀を凝視すれば、結局男子は何等かの職業をもち、之によつて、一面には家をさゝへ、一面には世に貢献するのであつて、立身といひ、成功といふも、つまりは職業上の立身であり成功である。且つ、教育も人格の力も相あつまつて職業的努力となるのであるから、配偶者の職業といふものは、最も注意して詮索せねばならぬ。此の事については第二編のはじめにのべた所であるが、どうも職業の事についての理解なり注意なりがたりないやう

に思はれる。

實際、結婚問題に直面して、相手方の調査をする時、候補者の職業を中心にしてしらべると、可也色々な材料が得られる。其の職業の現在の收入から將來の見込、榮達の如何、候補者の勤務上の評判から翻つて、能力・學歴・平素の行狀・家庭關係・從前の行爲・人格などについて、職業關係をたどれば、明かにされる便宜も少くない。

第四は配偶者の年齢の問題である

相手の年、これは、男子として一般に婚姻時期と考へられてゐるのが、廿五六から卅一二位迄だから、自分の方も一般の婚姻期の年齢ならば、さして問題にならない。が男子にして四十歳に近い時には、それまでどんな事情があつたかに疑問が生ずる。よく〳〵のへんくつ者とか、再婚・三婚だとか、無妻遊蕩でとぼして來たとか、何か問題がある。中には、自己の勉學の都合とか、弟妹への努力の爲とかで遲くなつた人もあらう。通常よりも早い時期に結婚する男性にも何かの事情がある。たとへば兩親が死にたえたとか、早く家をかためて賢業を主宰せねばならぬとか、時には、放蕩をなほす爲に妻をもらふ——といふよりも、親が放蕩防止に妻を貰つて預けるといふのもある。

だが、通有年齢の時に、さうした疑點のない時に、問題となるのは、自分との年齢の差である。通例女子の方が年下といふ事になつてゐるが、其差が少な過ぎる場合には、どうしても女子の方が早く老けてしまふ。心も體も老が早いから、主人の勢力のあり餘る頃、自分はお婆さんの氣分になり了るので、中年以後に問題の起る事がある。又之に反して、年があまりへだたつてゐても、共鳴點が少い。十五歳も十六歳も年上の夫をもつ妻が、苦勞する話は世間によくある事だ。そして十八の娘が卅五歳の夫をもつたとして、かゝる心のへだてのある外に、之が二十年たつと、夫は五十五歳となり、妻は三十八となる。夫はすでに活動期をすぎ、妻は女盛である。そこにも色々の缺陥が生じ易い。あまり若い妻をもつ夫が、短命だといふ事を唱へる人がある。一考を要する問題である。

以上の外にも、配偶者にもとむべきものは澤山あるであらうけれども、一方には自分も理想や長所をもつと共に缺點をもつた人間であり、且つ或程度の年頃に、何とかきめねばならぬものだから、さう澤山の條件の悉くを滿足するやうな口は、やたらにあるとも思はれぬので、結婚生活にどうしても必要なものとして、健康・遺傳・處世能力の三要素をあげたのである。さて、かかる點に於て理想に近いものを好配偶とするのだが、如何にして求めるか、又かゝる三要素を如何にして其筆者から知り

得るか、そしてそれが知り得た時に如何なる方法で成立させるか、之は次の楽しい考察點である。

一九　媒酌是非

1　結婚と愛

私は、大正十三・四兩年度に於ける內務省警保局の犯罪統計を見て、實はビツクリしたのであつた。思想の變化といふものが、こんなにまでマザ〳〵と實際の問題に表現するかと思つて恐ろしくもなつたのである。氣をつけないとあぶない事である。

姦淫・重婚等の罪が、十三年度には一五八五件だつたのが、翌十四年度には二〇三一件になつて五〇〇件ばかり增加してゐるが、それはまだよいとして、墮胎罪が十三年度には三二五件なのに、十四年度には一二二二件で後に四倍の增加を見せてゐる。嬰兒殺はといふと十三年に二百件が翌年に二六三件。之もふえてゐる。之を以て見ても、如何に風紀のみだれ來つたかといふ事がわかる。之等は官憲の手にはいつた材料にすぎないけれども、見えざるもの、顯はれざるもの、程度の之ほどに至らぬも

のを數へたら、實に大きな數字が出て來るであらうと思ふ。

私ははじめに、當今は社會思想の變革に伴ひ、女性の地位の變動してゐる過渡時代だから離婚が、といふ事を云つておいた。前例の激增した犯罪數字も、つまり此の過渡期の犠牲者の數に外ならぬ。實際よくもよく考へておかなければ、一生をあやまる事が出來てしまふ。結婚を終へた年頃に於ては、此の犯罪に最も關係深い時代なのである。

此の頃は、よく雜誌や書物などで、戀愛と結婚の問題がさかんに論議されてゐる。そして、新しい說としては、戀愛を以て出發せぬ結婚は罪惡だといふ。愛のない結婚生活は罪惡だからわかれてしまふがよいといふ。論の眞諦に觸れて見ると、本當に成程と思はれる事なのだけれども、既に戀愛に陷ちてゐる人々にとつては、此の說が無上命令的に都合のよいものと早のみこみをされてしまふし、家庭生活にひゞの入り出した人々には、愛なきものは離婚すべしといふ說が、淡りに舟である。さうして、分別もなく思ひ切りよく大膽な事をやつてしまふものだから、結果として墮胎罪が年に四倍したり、三角關係などいふ結婚數學が解けないでなやみぬくのである。恐ろしい事である。

抑々從來の結婚は、金の爲、野心の爲、地位の爲に行はれる事が多かつた。男女の何れか一方がいや

いやながら自己を犠牲にして、一生を他の家に捧げるものが多かつた。婚なるが故に飽がふるへず、嫁なるが故に服從のみに終ちねばならず、やう〳〵男尊の時代が去つて自分の代になつた頃は、もはや人生の七八分通りをすぎたものになつてゐる。みじめな裡に一生を送るものが、男尊女卑の我國に多かつたのは事實である。所がそこに、唐げられた人々に對する覺醒運動が起つて、婦人の地位を向上せしめる事に努力した。女權主義が女性の爲に氣を吐くし、戀愛至上主義が橫行するし、で、女は次第に色々の意味で問題になり出した。一方、女子の教育程度も漸次高まると共に、女性が自己を無にして奉仕してゐた時代から、自己を中心にして威張らうといふ時代にまで進んでしまつた。世上にあらはれる、聞きぐるしい女性の罪惡も、つまりこの產物である。反動時代の所產である。

かうした過渡時代に、各人に考へさせられる問題は、結婚をするのに、媒酌人によるか、自由戀愛によるかの問題である。今までは、自由戀愛に出發する結婚は、數に於て少く、一般慣習が他動的な媒酌婚にあつたから問題にならなかつたけれども、此の頃では、戀愛を以て成立せぬ結婚はいけないといふ思想がまくしたてるものだから、何人も迷はざるを得なくなつた。けれども、此の問題は、國の制度、家の習慣、長上などの考と無關係に出來ないものである以上、當事者のみが、新しい考にな

つても、周圍が新しくない場合には完全なる目的はとげ得ない。つまり今の時代に於てどちらがいゝのかといふ事が、貴女方にとつて緊切な問題なのである。少しばかり考へて見よう。

所謂自由結婚といふのは、在來の强制結婚に對する語であつて、當人同志の自由意志から選擇された、戀愛に立脚する結婚である。結婚といふ事は大事な事だといふ話は、今更する必要もない位であるが、男とちがつて、女の人は一度結婚してしまへば、まづくなつて又外に行くとしても、初めてのやうには價値づけられない。辻もねうちがさがつてしまふ。一度定めたならば終生繼續する考でなくてはならない。それだけ、配偶者を求めるのが重大になる。が之を他の人にまかせておいて、自分の考を加へる事も出來ず、希望も容れられないとしたら、其家庭生活は樂しくない事が多いであらう。

所が戀愛結婚ならば、相互の理解といふ事が出來る。少くも或る月日の間は、互に接する機會があるから、相手の性質ものみこんでしまへるであらう。殊に從來行はれた强制的方法に於て、相手の性格は勿論、顔もしらなくて一緒になるといふのに比して、まさる事は大きいものがある。そして又他の人が選んだものでなくて、自分達が互に意氣投合したのだから、結婚生活の上に、責任ももつ事になる。

さが、此の長所は、大きな假定の上に立つてゐる。即ち、お互が相手の性格をよく洞察する力があり、結婚生活に必要な諸要素として、前にあげておいたやうなものを體得し、之を以て相手からよく共の要素の有るかないか、どの位あるかといふ事を見て、大丈夫幸福な家庭がもてると推定出來たとすれば、如何にもこの戀愛に出發した結婚は推稱に値する。けれども、それは貴女方に、どの程度まで出來るかは、御自分でも決定出來ない事ではあるまいか。如何に出來ると思つても、其場に至れば、別な風が吹くのだから。

別な風といふのは、感情といふものである。愛の感情で一ぱいになる時には、理性の眼を相手になげかける事は困難である。否、愛の心が高潮に達すれば相互の全心全身を支配し、何ものをも灼熱するほどのものである。之は、生物の二大慾望の一たる繁殖といふ過程が、人間にも力づよく表はれ、本能として特殊化傾向をもち、第一に接觸したものと、相愛する傾きのあるものだといふ事を前に述べたが、この方面から見ても、相手を理知の判斷にまかせる前に、まづ愛情を與へたい性質をもつてゐるのである。

戀愛は感情と意志とのつよい表現であつて、理知は力よわく排斥され勝なものである。だから「信

疵がゑくぼ」に見えるのである。相手に信用をもつ時、其長所はいよ〳〵長所に見えると共に、短所までも長所に見えるものである事は、ひとり、戀愛の場合に限らないけれども、特にこの場合に於て甚だしい。危險はこゝにある。

戀愛で一ぱいになつてゐる時には、二人の間にこの一體的な力があれば、どんな思をしてなりと、いとはない。あらゆる忍苦に耐へて楽しい一生が送れるし、送つて見せる。他の周圍の人が何かと自分達を暴弄し、反對し、妨害すればする程、自分達は其結合力に力を加へて之に挑戰しようとするえらい力をもち出す。周圍のものと、二人との間の意志の爭鬪が、世上のあらゆる悲劇の源になつてゐる事は、新聞記事にも戯曲や小説にもありあまるほどの例を知つてゐるであらう。しかし、結婚はさうした心で成立したら、幸福であらうけれども、結婚生活は、それだけではやつて行けないから困つてしまふ。

戀愛から進んで結婚に行けるものはまあ幸福なのだが、それまでには苦勞しなくてはならぬ。してはならぬ事をする點に於て、世間の一般に對して、妙なひけ目を感じ、たえず警戒しなくてはならぬ。そして又、その問題は多人數共通な意慾だから、何者かが、熱中してゐる二人を見た時に、何とも思

はない人はない。思ふ事になれば、之を人につげる。燎原の火の如く八方にひろがる。此に兩人は四面楚歌の聲をきく。しかし、この中をきり抜けて結婚すれば、芝居はすむ。看客は皆散つてしまふ。二人の緊張した努力はうすれる。そして、今迄は、ずつかりすると、一緒になれぬといふ不安があつたのを、もうさうした危險がなくなる。即ち求めたものが得られた時の安易な心の一方に、ある物足りなさが出て來る。之から幻滅時代がはじまるのである。

青年時代の特色として、總てのものを極めて主觀的な標準で觀察し判斷するので、戀愛時代には、世界が美しい薔薇色の霞に包まれてゐる。殊に異性に對しては、あばたをゑくぼに見ようとする美化傾向、理想化傾向のある所へ、相手に對してありとあらゆるいゝ點を見せようとする誇示作用が表はれる。即ち自分のもつてゐるものは、體でも、心でも、所持品でもあらゆる美點を發揮して相手に氣に入られようとする。異性牽引には所有の誇示といふ事が、動物の通有性なのである。故に、時々際會する場合のお互は、男は男らしい美點を最もよく發揮し、女は女性美としてのあらゆる美を發揚する。けれども、もはや結婚生活にはいると、毎日廿四時間、美點の發揮にばかり熱中して居られもせず、結婚といふ事を劃時代として、互に理解といふ柵から一歩越えて、我儘になり、露骨になつて行く。

熱の高い時にはうは言をまで云つたのが、さめて見ると、馬鹿氣た事をと後悔するやうに、だん〳〵冷靜に相手を見てくる。この時は、今迄のやうに、美化しようとせず、相手も美しいものを殊更に見せようとしてゐない。そこで、男らしい、頼もしいと思つたものが、案外意氣地のない怠け者だつたり、天使にも比すべき美しさやさしさを讃美した相手が、これは又案外お白粉やけのまづい顔だつたり、ヒステリー式な所があつたり、だらしがなかつたりで、互に寂しい心地がしてくる。かうなると缺點が見えてくるのみか、長所までも缺點に見える。はじめは、缺點を長所に見たものが、今度は長所も缺點に見るのだから、數學的に見るとえらい差になる。即ち結婚前の長所缺點を夫々プラス十、マイナス十で表はすと、マイナス十もプラス十に見るから、プラスが廿になる。所が幻滅時代にはプラスをもマイナスと見るから、プラス十がマイナス十となり、マイナスが廿になる。で結婚前と後との差は四十にもなるわけである。どちらも正常な認識に出發しないからこんな事になるのである。

結婚生活は一面繁殖の營みであると共に、榮養の系統の欲望をも合理的に充足せしめるものでなければならぬ。否、一家をもつてからは、榮養系統の欲望、之を擴めて、食衣住の生活費源の獲得といふ事が十分でなければ、結婚の生物學的目的迄る繁殖といふ事も十分には行かぬものである。そこに

行くと、夫の生活の闘士としての責務、處世能力が一番有力なものになる。しかし、戀愛時代に、理知がこの點の判斷に及ばないとすれば、其の缺陥はこゝに表明されて、生活維持が苦しくなる。一方には生活難に苦しみ、他方には愛の生活の幻滅になやむといふ事になると、結婚生活は頗る危いものになるのである。

だから、戀愛を以て出發する結婚といふものには、どうも理性的分子が少くなり易いから、出來る限り之をはたらかせねばならぬ。その爲には、處世上の體驗も必要であり、實生活の凝視と、其の實力もなくてはならぬ。故に教養が高く、年齢も重ねたものならば、比較的此心配は少いと一般的には云へるであらう。我國の民法でも男子滿三十歳、女子滿廿五歳以上になれば、戸主の承諾なしにも婚姻の届を受理する事になつてゐるのは、この間の事情を物語るものと云つてよからう。

兎に角、相手方の諸要素を分析して、これならばといふ正當な判斷の下に、愛の理解が出來た自由結婚ならば、立派なものだともいへるであらう。しかし、土臺が無分別な性質をもつてゐるだけに、結婚にまで行く途中、遊戯的なものに終つてしまふ事が少くない。所謂モダーンガールなどには、結婚を目標とせず、又究極理想とせぬ、一時性戀愛に耽溺する輩が少くないといふ事である。たとひ自

分はさうした不貞面目なものでないとしても、相手の心は推測出來ない。その間に、唯一のものを許すとか、悪い記念物を殘されるとかすると、その一生はもはや呪はれたものになつてしまふ。一度び貞操上の缺格者となつた女性は、とても判斷の出來ぬやうな大膽さと自暴性をもちたがる。前述の犯罪統計などは、悲しい事ながら、かうした過程の表現ではなからうか。

かりに、双方が相手方の美點・缺點をよく見ぬき、結婚生活に於ても十分やつて行けるといふ事がわかり、お互は、同く其の身を持して、來るべき日をまつといふ感ずべき努力を拂つたにしても、親なり戸主なりが承諾を要するものである以上、その人々の考を入れなくてはならぬ。所が、時代の思想は如何に新しくなつても、時代と共に思想を進ませる兩親といふものは、澤山あるものでない。わけても、固い考のみをもつて終始してゐる厳格な家庭に於ては、たとひ、二人が理想的な好配偶者だと、他の人まで認めるほどのものでも、迚二無二之に反對する事が少くない。その爲に、生命をたつやうな場合が生じたり、生木が割かれたり、内緣の妻として、生れた愛兒までが法律上私生兒になつたりして、楽しかるべきものが、紳にゆがめられる事がある。近頃は、世の親たちも、ずゐぶん開けて來たやうだけれども、實際の場合になると、自由結婚は成立が困難になる。

とにかく、兩人が理想とし、他から見ても理想的な結婚だとせられ、雙方の兩親ともよく諒解してめでたく結婚出來るといふ事は、望ましい話にはちがひない。けれども、日本の現在の習慣では、誰にもかういふ機會が與へられてゐるかといふと、之は殆ど絶望である。よい家庭ほど、異性との接近の機會が少くなつてゐる。だから、機會の來ないものには、自由結婚は出來ない。皆が自由結婚でなければならぬとすれば、現狀では一生結婚の出來ない人が大變出來てしまふ。たとひ機會のある人でも、接する異性は限られた少數であるから、その中から見出したものでは、理想的なのがあるかどうかも、形式的に考へて、問題ではあるまいか。

異服をかふにも、同樣のものが、五六反しかない中から選ぶのと、何百反の中からより取るのとでは、偉くちがふではないか。では、すべての男性と女性とが、皆解放されて、互に理解運動をするといふ事が出來るとしようか。何といつても男性がまづ引きつけられるのは、女性の顔の美にあるのだから、美しいものは優勝的地位をしめても、美しからぬものは、まことにあはれな、氣の毒な事になつてしまふ。要するに、兩性が結婚の眞義を體し、洞察力にとみ、感情を以て理知を裏切らず、そして、正しい意味の自由な交際が出來るやうになるまでは、自由結婚には不可能な條件や困難な問題が

とても澤山あるのである。大分、かう考へて來ると、近頃はやりの戀愛至上主義も鳧むきが悪くなつて來た。では、やつぱり從來の媒酌結婚にしようか。

2　媒酌まかせ

自由戀愛による結婚は、愛が出發點になるが、媒酌結婚では、結婚生活に必要な要素の分析がさきになつて、戀愛はあとになる。結婚生活はさう平和の連續ばかりでなく、隨分苦しい戰に直面する事もあるのだから、生活に必要な能力や資格をそなへて居るといふ事が、やがて幸福の源泉となるのである。この源泉を見出す爲には、理知の判斷が要り、處世上の體驗も要る。所が、當人には、その判斷も體驗も稀薄である。そこへ行くと、媒酌人から話が出て、兩親や長上のものが己の長けた理性と、永い處世上の體驗とでよく觀察し、調査し、判斷するのだから、そして又、愛する我が子の一生の問題を決定するといふ眞劍な事だから、其の處置は信頼に値するものが多いといへる。此方法ならば、異性との接近の機會がないとか、美しからぬ人が結婚出來ないとかいふ事も少い。牛は牛づれ式に、どこかのわれ鍋には、丁度いゝとち蓋を見つけてくれるものである。只、さうして成立した他動的結婚

で、果して愛の感情が起るであらうかが疑問であらう。けれども、人間は、單なる同僚とか親戚とかで、同性がある年月の間、生活を共にしただけでも、そこに愛情が起るのは自然である。殊に、それが、其の家での唯一の同情者であり、慰藉者であり、生涯の伴侶であり、よい半身であると思ふ時に、何等の愛情の生じない筈はないのである。世間には顔も知らずに結婚した人でも幸福に送つてゐる者は澤山あるが、よく理解し合つて、大丈夫と思つた自由結婚の家庭に、愛情の瀾濤したものも澤山ある。私は兩者の心次第で、媒酌結婚だから夫婦の愛に充實味がないとは決していへないと思ふし、自由結婚だとて、平和な一生ばかりあるとはいへないと思ふ。

只、媒酌結婚では、結婚生活の本質としての當人の意思が十分表はれ難く、周圍の者の意思や特殊な事情に支配され勝なのが困る。媒酌人の良心といふものからしてが、甚だ問題である。餘にも仲人口といつて、いゝ事は誇張的に並べるが、悪い事、都合のよくない事はひかへてしまふ。一切合切、アケスケにぶちまけて、それで氣に入つたらまとめようなどといふ態度では、中々成立しがたいものだし、もし成立しないと、何となく氣まづい思をするものだから、話がはじまれば、何でもかでも、まとめあげようといふ、成立本位の媒酌が多い。

雨親の方でも、本當に我兒の結婚生活に幸多かれと願る爲に、若いもの〻心を理解し、時代精神を認め、結婚の本質に直進すれば、媒酌人の言のとるべき所をとり、調査すべき所を綿密にするから、成立後も危險やあての狂ふ事が少いけれども、年のいつた雨親にとつては、若い人の心がのみこめない。現在己の心の中に求めてゐるものは、愛慾ではなくて、生活慾である。むしろ物質とか又は名譽とかいふものをもとめてゐる事が多いから、さうしたものに重點をおいて判斷する〻又結婚といふ事を手段として、相手の家の財產を利用しようとし、地位のわけまへを得ようとする。かういふ場合には、夫婦の間の愛情などは、雨親には第一の問題でなくなる。そして、其の手段に力瘤がはいると、其の結婚は壓制となり、强制となり、我兒に犧牲を强要するやうな事になつてくる。前に掲げた「日輪」の德惠子の雨親などは正しくこれである。戰國時代に於て、敵に對して一時の緩和手段として、政略結婚をした事は、國史上に澤山ある事である。今日でも、財產結婚・地位結婚は珍らしくない。

元々親たちや周圍の人に都合のよいやうに話をまとめるのだから、本人の意志は主張されない。そこに的のはづれた、愛のない結婚が生ずる。しかしそれでも、偶然にも配偶者の人格が立派であり、すべてが自分の理想にかなふやうな場合には幸福であらうけれども、それは、はじめから豫定の出來

ぬ實義的なものである。私どもの何とかしたい事は、此の實義的な性質を出來るだけ少くする點にある。自由結婚も、本當によく相手をしらべ得ないし、媒酌結婚も、當人の本質的なものが見出しかねる。一番大切な結婚問題も、考へれば考へる程むづかしくなる。媒酌はとても恐しくて出來ないといふ人があるが、なるほどとうなづかれる。何かい〻方法はないものだらうか。

3 媒酌約婚

自由結婚の缺點は、必要な判斷をする能力の不十分と、とかく常軌を逸した行動にはしり易い點にあつた。又媒酌結婚の短所は、雨人の理解や愛の發生のうまくいかぬ所にあつた。雨方法は互に一方の長所が一方の缺點になつてゐる。之をつきまぜたやうなものが、媒酌約婚である。具體的にいへば、大體い〻と見定めた後、まづ交際をして、成立か否かを決し、成立するとなつた上は結婚までに愛の醸酵をさせるといふ方法である。

この方法は、雨者を知つた媒酌人が、雨者及其の親達と話をつけも。此點は全く媒酌結婚と同じであるが、新のやうすで、まづ會つて見ようといふ段になる。そこで日をきめて雨者が會見する。かう

いふ時には、兩者は愛じらうて、たまつてゐるのが普通である。そこを、第三者たる仲人が、本質的なものに關係のあるテーマを見つけ出して、場合に適した話をする。そして當人同志が話しあふやうなチャンスを作つてやる。かうしてゐる間に、物ごし・ことばつき・風采・人格・能力、さうしたものが綜合して、こゝに第二印象がおぼろげ乍ら表はれて來る。一二回かういふ事をする中に、共鳴點が見出される。どうぞ、互にうちの方をお調べ下さい。別に、仲人の方に云つた外には問題はありませんがといふ。互にしらべて見る。すべてがよいといふ事になれば、そこできめる事にするし、交際して見ても、調べて見ても、氣がすゝまぬやうな時には之をやめるのである。話がまとまつてから以後は心得べき事を十分注意して、監視の眼の光を、うすくする。そしてこちらは愛情の醸酵を外の方から楽しんで見てゐる。やがて定められた日が遂に來て、めでたく式をあげ、幸福さうな主婦ぶりを見に行つて、「主婦ぶり優等」と讃辭をあびせかける事になれば、めでたいものである。

このやり方は兩方法の特長をとらへたものといふ事が出來るであらう。只交際の方法があまりに奔放では自由結婚に近い弊があらうし、あまりに理知の眼光を烱々としてゐるばかりでは、ぎこちないであらう。又交際期間も長過のないやう適度があると思ふ。人々の境遇によつても一月でいゝ事もあ

るだらうし、半年以上も必要な事があるかもしれぬ。しかし話をきめてから結婚までは、あまり長ばかぬ方がいゝがと思ふ。結婚前では、何といつても遠慮があり、遠慮せねばならぬ事もあるので、時期の永い事は色々な弊をかもす事になる。

此の方法は、いゝと思つてゐるが、地域的支配を受けるのが缺點といへばいへる。といふのは、あまり遠い所にゐるお互同志では、交際するといふ事も十分に行かないからである。文通といふ方法もあるけれども、之も會見と殺り劣なくては、眞の生活相がわからない事があるであらう。それにしても、媒酌人がしつかりしてゐて、虛心坦懷に、誠意を以て結合を希望し、兩人に對して、觀察點や注意すべき所を指示したならば、自由結婚や媒酌結婚の弊を受ける事はないと信ずるのである。

二〇　結婚生活の幸福

1　眞實の生活へ

女學校を卒業する頃から、自分の行くべき道、とるべき事について、いろ〳〵に悩みぬいたあとで、

或は高等の學校に進み、或は職業につき、或は家庭で實際に修養をつんで、三四年の間を經過するは夢の間、さていよ〳〵女性として結局行くべき所に來たのである。

結婚問題に直面した時、その何ものたるかを知らなかつたならば、其の後の生活にどのやうな事が待ちかまへてゐるかが不安でたまらないわけであるが、結婚生活の如何なるものか、如何にあるべきものかを知つて、いよ〳〵その中にはいりこむ時には、不安の裡にも、或る樂しい希望と、潔い覺悟とが生じてくる。

今迄の生活は、單個としての生活が中心であつた。自分を愛してくれる親といふものがあつて、すべての事を庇護してくれる。之に從つてゐさへすればよかつた。けれども、一度び結婚生活にはいれば、自分は一方の主でなくてはならぬ。何事も主人の命に盲從するといふ事では到底一家の主婦としての務めも出來ない。まして內助の功などは覺束ない話である。自分がしつかりしてゐなくてはならぬ。まえた頭をもつてゐなくてはならぬ。感情を中心にした處女期の生活をすて、理性を以て何事もとり裁いて行かねばならぬ。

娘時代は自分といふものだけで事がすんだものが、結婚してからは、夫妻が一體意識にならねばならぬ。一體意識、之を一方からいへば、戀愛生活である。戀愛が結婚の基調であるといふ近代の思潮は眞理である。私は結婚前に發生した戀愛でも正しい理性の支配をうけたものならいゝと思ふが、世間の認めない點に於て、さま〳〵の難點がある。じかし結婚してからの、夫妻の戀愛は、之は公認戀愛であり、道德的戀愛であり、はたから見ても美しいものである。結婚が戀愛に出發する、といふよりは、結婚後に於ても、漸次芽生え行く戀愛を大切なものとして、之が熱を高めて行く事が必要であり、かくする事が夫婦和合といふ事になると思ふ。結婚前の戀愛生活は、戀愛だけでよかつた。けれども結婚後の戀愛生活は、綜合的なものである。前に述べたやうに、夫は社會的に活動する使命があり、妻は主として家庭內に活動する役目がある。男子が未だ一人でゐた時には、身につゞれをまとひ垢のついたものを着ても、人はさほど非難しなかつたものが、家庭をもてば、夫のみなりは、妻の心づくしの程度を示すものと世の中は觀る。ヅボンに折目がなく、ハンケチがきたない夫に、世は、妻のふしだらまで透視する明敏さをもつてゐる。子供が生れる。其の子の能力・しつけ・服裝、すべてが妻たり母たる人の表現であると觀る。「己のきはりは己也」で、すべて自分のなすべき範圍、支配すべき範圍內には、自分といふもの、自己のうでといふもの性が表現される。かういふ中に生活して、自己

と後悔する時に、今まで問つた問題も技藝も、悉皆も皆出現してくる。そして、彼のしつかりしてゐるか否かは、夫の社會的地位の進展にも至大な關係をもつて來るのである。

2　順應から創造へ

若い時には、新しい生活に入り込むに方つて、周到な準備と確固たる理想とをもつても、往々現實に直面して、すつかり悲觀する事があるものである。結婚は結婚生活の發端だとなし、我こそは天晴賢夫人にならうとして、料理から洗濯・裁縫は云ふに及ばず、夫との理解和合の爲に、趣味的な樂樂をでもあ〳〵もしよう、かうもしようとプログラムを定めて、すぐさま之を新家庭に實施しようとする時に、悲觀の場面が展開するのである。

といふのは、まだ新生活に對する原理を知らなかつた所に原因があるからである。新生活に對する原理は、Adaptation 順應から、Creation 創造へとちわ〳〵進む事である。貴女の結婚生活の第一歩は、實に順應にはじまらねばならぬ。結婚生活は、自分の今まで二十年もの間に經驗せぬ所の、心理的生理的な經驗に直面する生活革命だといつてもよい。自分の心や體に大きなショックを受ける事が

多いのみでなく、夫なるものにも同樣なショックが來るのである。で、そこに新生活へ順應すべき色色色の事が出て來る。實に夫妻の間のみでなく、兩親や、夫の弟妹のある家にはいつたものは、しばらくはエトランゼエ(よその人)である。之等の人に對して、自己の「我」をとほす事は出來ぬ。家族に對して順應せねばならぬ。家風や家の慣慣に對して順應せねばならぬ。自分のもつてゐる新知識から見れば、實に下らない事もあらう、能率のあがらない事もあらう。しかしまづ之を肯定し、之に順つてゐて、漸次に己のもつてゐるいゝものを小出しにして行くのである。

結婚生活に限らず、何事でも、新しい生活にはいつた時には順應を必要とし、其の間は、在來の習慣と、新生活に於ける習慣とのくひちがひがある爲に、順應する事は樂なものではない。

兒童は初めて小學校にあがると色々の病氣が出る。順應苦の產物である。女學校にゝ學した頃は、友達も少く、先生に知つたものもなく、習ふ學科が新しいので、何かとしつくりしない。その中に次〳〵友も出來、先生ともなれてくる。學科にも親しみが出來てくる。之は順應し得たからである。

結婚生活での順應に於て、一番困るのは、舅姑や小姑に對してであらう。夫が獨身でゐる頃は、家の兩親や其弟妹は、息子として、兄としての愛を感じてゐた。別に其の愛を侵害するものはなかつた。

所がそこに妹がくる。妹は本当の息子から愛と幸福。見としての愛愛は、息子に来はれた。妹は妹で新しい生活、皆知らぬ他人の家に来て、只頼るものは夫である。夫のみが一生の伴侶である。夫と彼女の結婚をする。それが深くなればなる程ど、はたから見れば、息子の愛が妹にとられたと思ひ、兄の愛が、兄妹に幸はれ先と思ふ事がつまらなくなる。かういふ心地は、はつきりは意識しないが本能的にさうなつて来るのである。その潜在的な心の不平衡は、妹の能力や品性などの批判となつてもらはれる。先から、ともすれば妹につらくあたる。「息子定」の時もとゝかう生まれるのである。親孝行な評判じ子子、これた妹が来てからは、たつた一人の母親が、とても寂しくなつてだん〳〵よわいひとやり出すといふ事は、世の中に珍らしくない。小説「若草」の如きも、こゝに主題があり、ユーゴーのミゼラブルに於ける、ジャンバルヂャンが、育てたコゼットに夫をとられまいとする心理とも。

うらさびしさを感ずるといふ点でも、この心理とも。

神先か、かうなると、家族の多い所へ行つて暮らすのを思ふ者もあらう。が、後の場合は、まだ、[illegible]から、かゆい所に手の届かぬ事が多い。[illegible]の場合は、[illegible]にある。

[illegible]も、新夫婦の間に[illegible]つて来たから、

[illegible]の苦労はなくなつた。昔の嫁と姑とは[illegible]したものである。それにしても[illegible]しろ、[illegible]むるものは好配偶者の求から、配偶者に[illegible]的なものがあつたとしたら、家族が多いとかふやうな事は、一時的の手抱で解決のつく事柄の求から、その事の為に、好配偶をとりにがしてはまちがつたと思ふ。そして、かういふ家庭にはいれば、心理的に、「愛を幸ふ」といつた気分があるものだからも、そこは除の気持で、よく家風を尊重すると共に、家族に対するまことをつくしまへすれば、決してそんなよわいぶりは出来ない。かくする事が即ち[illegible]であり、[illegible]によつて、自の為に一家をなす大きな[illegible]とゝいへるものである。

[illegible]術に治めて行く事は、一方からいへば、大きな創造とゝいへるものである。

かうして、まづ[illegible]生活に手抱してある間に、此の家の人々の間に於て、[illegible]すべきものの適当な點がだん〳〵見えてくる。かういふ時に、今までの貴女の直覚を傾けて、其の家の[illegible]にはかつて行く。こゝに創造の生活がひらかれる。こゝに貴女の個性が出る。こゝに貴女の本当の生活が表現されるのである。

3 愛の培養

私は書物屋を捜つて買ひたい本を求める時に、結婚といふものもこんなものではないかしらと思つた事がある。書物屋で、これはと思ふタイトルの書物をひき出して、目次をサラツと見、序文をザツとよんで見る。本文の所々を拾ひよみする。だん〳〵買ひたい氣分が濃厚になる。つまり見合又は自由交際をやるのだ。そしていよ〳〵買ふ事にきめて、うちへもつてかへる。其の間は無しやうに嬉しい。うちへかへつても、包裝紙をしばつたテープの結び目をゆつくりといてゐるひまもなく、力まかせに切つて、しばらくは其の美しい裝幀に見惚れ、芳烈な香のする新しい書物をめくつて陶酔してゐる、新妻の美裝をしつと見るやうに。だが、だん〳〵よんで行くと、案外下らなかつたり、ペサ〳〵したものに思へたりして、しまひには書架の隅つこの方へ押こんで、ほこりだらけのまゝにしておく。そして又新しいのを見染めて、又同じやうな過程をくりかへす。何だか浮氣ものゝやうな書物あさりをする事がある。

結婚の話がはじまつた時、これならば理想的だと思つて、熱心に成立を祈り、成立の爲にあらゆる努力奔走をする。さてしつかりと確定すると、あゝ私の妻はきまつた。もうこれだけだ、と思ふ人は澤山あるさうである。困つた話であるが、或はこれが人情かもし れない。

現に角、結婚して四五年たつと、お互がよく理解してしまふ。理解しすぎてしまふ。即ち、能力なり長所なり缺點なりがわかりすぎてしまふから、單調になる。變化がほしくなる。「結婚後のあくび」は此の頃に出るさうである。「夫婦生活の態度を如何にすべきか」など、婦人雜誌にも散見するが、なるべく社「あくび」の出ないやうにしたいものである。

一體、結婚生活の中核なる愛といふものは、無限につきない泉のやうなものではないと私は思ふ。愛はしぼり出すだけの努力がなければ涸渇するものかと思ふ。愛はたしかに結婚生活の幸福の基礎かち、幸福を念ずる爲には、愛の永劫を念ずる事がなくてはならず、愛の永劫を念ずるには、たえず愛の培養を心がけねばならぬ。

愛の培養は、努力しなくては出來ない。夫の社會生活をよく理解し、家の事は心配なしに、自由に世の中で活動の出來るやうに、心の中も、家妻も、身支度も、申分なくしてあげる。うちにかへれば、年をとつても容色のおとろへを見せぬ妻の、己を無にして奉仕する誠意に打たれ、すく〳〵と育ち利口さうな我兒にかちまられる時に、さう夫妻の間にあくびなどが出るものではないと思ふ。

夫妻が、夫の事業の發展の爲に相計り、我子の養育の爲に談りあひ、其の爲に夫は外に、妻は内に、

各々勤労の生活をつゞけて行く上らば、愛の生活も、結婚として愛の中にあらゆる〜正味のものでもあり、どん生活者も、どん生活者も、愛の結婚の時に生活と共にたゞ〜生活もあいでもあろう。

光が近頃は、自由結婚者が大分多くなつた。生活の問題と愛の生活とつゞけるの社會者ぶとい、エモレンケイの結婚生活者、多くの新しいものには結婚のない人間であろう。けれども、結婚もなしに結婚し、はじめのアレクシエ生活の間と、結婚者ぶとと、最初のアレクシエ生活の間とは、結婚者ぶとと、最初のよくわかれてしまう。そして又次のフレクシエなる一時的愛情にひたる。若い中はフレクシエ者もうつゞけるよくあるもしれないが、そのうちに年をとると、人はよりかへつてくる。家から男へ、花から花へ、心は常に、自己と結婚者に帰つてくるのであろう。結婚と結婚者とは別問題に結ばれるもの。結婚者は別問題に結ばれるもの。結婚者は別問題に結ばれるもの。結婚者は別問題に結ばれるもの。

愛の生活も、貴女の生活三回年間の「結婚」にたゝつて、多幸なる愛の殿堂を建設されん事の外に何ものもないのである。

女學校を卒へて　歩

女學校を卒へて

昭和三年四月十五日印刷
昭和三年四月十六日發行

全頁　全紙面二十頁

著作者　小山家太郎
東京市麻布区霞町一ノ一

發行所　株式會社　三省堂
東京市神田区三崎町二丁目十番地

印刷者　株式會社　三省堂印刷部
東京市神田区三崎町二丁目十番地

印刷所　株式會社　三省堂印刷部
東京市神田区三崎町二丁目十番地

（東京）（振替口座大阪）
（東京）（振替口座三十五番五）
（大阪）（振替口座）
（大阪）（振替口座八三二〇〇）

發行所　株式會社　三省堂
東京市神田区三崎町二丁目十番地
發行所　三省堂大阪支店
大阪市東区淡路町二丁目

大妻技藝
大妻高女　校長　**大妻コタカ著**

標準裁縫書

前編　壹圓五拾錢　　内地書籍送料
後編　壹圓八拾錢　　各・拾八錢

◆經濟デ仕立榮ノスル裁縫ノ御相談相手◆

本書は著者の多年の經驗と研究とを基として種々の方法中最も一般的と思はれるものを採用し、徒に理論に走らず、流儀に囚れないやうに致しました。

本書は前・後編に分れ前編（二四六頁）は、普通和服、後編（二九三頁）は、洋服及和服のミシン仕立のもの等を收め、從來使用の鯨尺の替りにメートル尺を採用しこれ迄の寸法については鯨尺のメートル尺換算表を掲げてみなさまの御實習と御記憶との御便利を計りました。

本書は實科高女・技藝學校・實業補習學校等の裁縫教科書として、既に夥しき御採用を賜り、また一般御家庭向きにも頗る歡迎されて居ります。

發行所　三省堂

299
65